
BLACK★ROCK SHOOTER -PHANTOM-

モノクロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BLACK★ROCK SHOOTER — PHANTOM —

【Nコード】

N0436S

【作者名】

モノクロ

【あらすじ】

親友のヨミを裏世界から連れ戻してから早数か月——。マトはB★R Sの出逢いをただの夢だったと思い始めていた。しかし、中学最後の春。少年との出逢いをきっかけに日常は一変する。

B★R S好きの作者が遂にやっちゃった!!
かなり後悔しつつも頑張りたいと思います。

2011/11/8 只今テコ入れ中です！

Obverse☆プロローグ 終わりの夜、始まりの春（前書き）

初めまして。モノクロと申します。

今回、私の一番好きなB★RSを駄文ながらも書いていきたいと思っています。

・・・処女作なのに、エラくハードルを上げてしまった。

という訳で、誤字脱字やアドバイス承っております。

荒らしや避難コメントは受け付けませんのでご了承下さい。

「この作品嫌い！」という方は、お手数ですが「戻る」ボタンを押してください。

「おもしろそう！」という方は、お付き合い願います。

ではどうぞ！

Obverse☆プロローグ 終わりの夜、始まりの春

——— 一体、君は何処に行ったんだ？

逸^{はぐ}れてしまった手を、もう一度繋ぐ為に。
見失った君を、もう一度見つける為に。

「俺」は、光の中を歩き続ける。
迷子の君を見つけない。あの日の願いを叶える為に。
何度世界を巡っても、何度過ちを繰り返そうとも。

この地に刻まれた、沢山の足跡。
その轍^{わだち}を一つ一つ辿ってゆく。
きっと、君に辿り着く事を信じて。

それは遠い昔だったか、それとも遙か先の未来だったか。
それすらも曖昧な世界で、君と俺は出会った。

美しい黒色に映える、神々しい蒼色の光を持った君。

ひと目見ただけで、俺は心を奪われていた。
その蒼く輝く光を纏う、君に。

とても美しくて、それでいて儚さを秘めていて。

手に入れたと思った。君の全てを俺のモノにしたかった。

そう思って、有ろうことか俺は――――――

君に、闘いを挑んだ。

長い長い闘いだった。時計すら無い世界だったから、どれほどの時間を過ごしたかは覚えていない。

俺はその間に何人もの仲間や部下を失った……君も同じように
同士達を失っていたけれど。

最後に残ったのは、俺と君だけ。この世界にただ二人きりだけ残った。

それがとても嬉しくて、でもほんの少し悲しくて。

俺が君を殺すか、君が俺を殺すか、後はそれだけだったから。
待ちに焦がれたこの瞬間が、あと少しで終わってしまうから。

悲しいか、と俺は問うた。

君は少し考えて、悲しい、と答えたね。

その時の俺は傲慢で自己中心的だったから、勘違いをしていた。
君も、このゲームが終わるのが嫌なんだって思っていた。

でもその答えはきつと、俺が望んでいた答えでは無かったんだろう。否、きつとそうだったのだろう。望まぬ戦いに君や君の仲間を巻き込み、そして多くの犠牲を産ませたんだから、当然だろう。

貴方も？、と聞かれて、馬鹿な俺は嬉しくなった。

君の全てを手に入れる為に始めた、この『ゲーム』を始めたのは俺だったから。

悲しいとか、怒ってるとか、そんな感情は持ち合わせてなんか無かった。

でも、そんな馬鹿げたゲームも、もうすぐ終わる。

ああ、と俺は正直に答えた。

そして、とても悲しい、と付け足して。

それを皮切りに、俺と君は決着を着ける為の戦いをした――――
――――。

今更だけど、君は俺の事をどう思っていたんだろう？

絶対に良いイメージは持っていなかっただろうけど。

でも、初めて出会ったあの時に・・・君に伝えれば良かったんだろうな。俺の気持ち。

そしたら、こんな関係にすらならなかったのかもしれない。争いなんか起きなかったのかも知れない。

それすら出来ない程、あの時の俺は狂ってた。狂気の沙汰ってヤツだ。

冷静になった今としては、なんて馬鹿な事をしたんだろうって毎日思う。

・・・こんな女々しい考え、君が聞いたらひっくり返るかもね。慌てふためいて、目を白黒させてる姿が目には浮かぶよ。

ああ、でももうそろそろお終いかな。

目の前が暗くなってきた、もう手足の指すら動かせない。仕方ないさ、油断してしまった俺がいけないんだから。

『君の勝ちだよ、おめでとう・・・』

地に伏した俺を君が眺めている。

蒼い光を纏って戦う君。そんな君が大好きだった。

最期にそんな事、気恥しくて言えないけど。

『幸せに、なって』

敵ながら間拔けな最期の言葉だなんて、頭の片隅でボンヤリとそう思った。

でもこれは俺の本心でもあったから、言えて良かった。

じゃあね。俺の想い人。

もしもう一回逢えるのなら、次は君の隣に居ても良いかな？

「では、これより始業式を始めます・・・。」

季節は春。

花は芽吹き、命が生まれる季節が巡ってきた。

「————でありますので、えー、中等部3年生の諸君等は中等部最後の行事の取り組みや勉強に励み、後輩達を引っ張っていき————」

終わりはあるのかという校長の長話に、集中力が切れて退屈そうに聞く者がチラホラ出てきている。中には春の陽気に耐えられずに密かに眠る者も居れば、久しぶりに会う友達とヒソヒソ話す者も居る。

「・・・ふわぁあ・・・」

この物語の主人公である黒衣マトも、久々に会う校長の話す子守唄おはなしと春の暖かさのダブルパンチにノックダウン寸前である。うつらうつらと船を漕いでいたと思えば、ハッと気づいて体勢を立て直す。いつもは居眠りは苦手教科の授業以外しかしない彼女なのだが、ここ最近は寝付きがかなり悪く、寝不足の日々が続いているのが常である。故に今現在降り注いでいる陽射しにやられかかっているのだ。

「……早く終わんないかな……」

退屈な時間ほど、これ以上の拷問は無い。

校長の話も佳境に入ってきたらしく、マトはとにかく頑張ろうと頭を左右に振って眠気を飛ばそうとする。この長話が終われば、後は校歌を歌って終わりだ。

暫く話に耳を傾けていたマトだったが、努力空しく、彼女の理性のダムは遂に決壊し、眠りの波に攫むなわれてしまった。

黒白の夜の世界。

其処で自分に似ている少女が巨大な砲身を持った『★Rock C
anon』を片手に舞い踊る。
次々と少女に襲いかかる髑髏どくろを蒼い炎を纏った岩石で撃ち抜き、破
壊していく。

「・・・ねえ。貴女は誰？」

透明な壁の向こう側で戦う少女を観ながら、マトは少女に対して呟
く。

彼女はまるで、鏡に映した自分自身のよう。

ただ違うのは髪の長さ、人形のような無表情な顔だけだろうか。

左右の長さが違うツインテール、星のマークが付いたロングパーカ
ーを身に纏い、美しい青色の瞳を持つ少女。

「・・・前にも言った筈よ、私は――・・・」

少女の言葉は其処で切れた。

「・・・いさん、黒衣さん、立って！」
「！！」

後ろの女の子に肩を叩かれ、ハツとして頭を上げると、前後左右の生徒はピアノの流れる音楽に合わせて起立をしているではないか。しまった、寝てた！と後悔しても時既に遅し。

マトも慌てて起立し、すぐさま校歌を歌う。周りの女子がクスクスと笑っているのを気恥しく思いながら、先程の夢の内容を思い返していた。

———あれは夢、だったのかな。

マトは中学2年の秋頃、つまり最近のことなのだが———不思議な体験をしたのだ。

きっかけは親友、小鳥遊ヨミ^{たかなし}の失踪から始まった。

彼女とは中学に入ってから仲良くなったのだが、突然ヨミが何も言わずに姿を消してしまったのだ。

両親も失踪した原因を知らず、遂には警察が絡んでくる程の大事になってしまった。

マトも其れを気掛かりに思い、ケータイに連絡を入れる等して交信手段を取ってみたものの、彼女から連絡が入る事も無く、親友が居なくなってから三日が過ぎた。

三日目の夜、マトのケータイにメールが届いた。宛先は行方不明のヨミからだった。

慌ててマトはヨミを探しに出掛けたが、彼女からのメールの内容は何も無く、空メールで送られていた状態だったので手掛かりと呼べるモノは何もなかった。

そんな途方に暮れたマトに、幸せの女神は微笑んだのだろう。
空に浮かんだ蒼い星が燦然と輝くと、空から光が降り注ぎマトを包み込んだのだ。

突然の不思議な現象に驚いたマトの目の前に、その少女が現れ出たのだ。

その後の事を、マトはあまり覚えていない。

親友を助ける、その思いを胸に闇が渦巻く世界へ入っていった事しか覚えていないのだ。

気が付けば、マトは病院にいた。

心配して病院に来ていた母親から話を聞けば、ヨミを胸に抱え込んだ状態で気絶していたらしい。

マトはヨミはどうしたんだと騒いだが、彼女も同じように病院に居り、今は警察に事情聴取されている事を聞いて、マトは安堵した。

その後はヨミの両親が泣きながらヨミに説教していたり、マトが入室した瞬間にお互いがワンワン号泣しあったと、色んな事があったが、其れはまた別のお話。

今はヨミも元気だし、マトには色々悩みを打ち明ける様になった。更には、2年生の時に新しく友達になったユウと仲良くなっていき、徐々にヨミは明るく積極的な性格になっていった。

それ以来、マトは少女には逢わなくなっていた。

彼女の手を借りる事は無いからなのか、はたまたあの時の出来事はマトの頭の中で起きた妄想だったのか。真実は定かでは無い。

しかしここ最近、夢の中で戦う彼女を見るようになってきている。
まるで、何かの予兆の様に。

悪いことが起きませんように、と、マトは願わずには居られない。

「いやゝ。まさかの爆睡とはね。」

「マトらしいっちゃらしいよねえ？」

「でもさ、そのまま寝かせときゃ面白かったのに！」

始業式が終わり、教室に戻ったマトは赤面していた・・・。
仲の良いクラスメイトに寝ていた事がモロバレしており、今やイジリ
話のスターとなっている。

「で、でも、先生に見つかったら黒衣さんが怒られるし・・・」

「い、良いよ、ノンちゃん。ありがとう・・・」

それでもマトを庇おうとする野崎ミツカことノン。

マトが2年生の頃に仲良くなった子であり、先程マトを起こした子
だ。

発言はあまりしないが、いつも周りを気に掛ける優しい子である。

「それにしてもさ、なんでうたた寝なんかしてたのさ？」

「やっぱ部活？」

「ううんと、昨日はあんまり寝られなくて・・・。」

「ふーん？」

そして、クラスメイト達はマトの赤っ恥話から他愛ないTVについてへと方向転換した。

ようやく開放されたマトはホッとため息をついて、徐に携帯を取り出した。

その際に、青い星の付いたストラップがユラユラと揺れる。

親友と、お揃いのストラップ。

マトは長い溜息をついた。皮肉にも、今年はヨミもユウも同じクラスにならず、離れ離れになってしまったのだ。社交性のあるユウはともかく、ヨミは残念がっていたが、彼女にも新しい友達が出来たよ、と始業式が始まる前にメールが届いていたので安心した。

でも皆と離れるのは辛いな、と内心憂鬱のマトを他所に、担任の先生が教室に入ってきて生徒を席に座るようにと促す。先生の言葉にワラワラと蜘蛛の子散らす様に、先程マトを茶化していたクラスメイトたちも席に座っていった。

「始める前に聞きたい事がある！黒衣、昨日ちゃんと寝たのか？」

——突然の担任の余計なひと言で、教室は一気に大爆笑になった。

マトは、今度は顔を青褪めながら思った。

——今日はなんて厄日なのか、と。

O b v e r s e ☆ プ ロ ロ グ 終わりの夜、始まりの春（後書き）

いかがでしたでしょうか？

ちよつと妄想が入っておりますので、不快になられた方、大変申し訳ないです。

感想、お待ちしております！

R e v e r s e★名も無き墓守の唄／黒き流星に捧ぐ挽歌／

何度目の咆哮^{サケビ}だったろう。

何度目の慟哭^{ナミダ}だったろう。

君が倒れ伏した時、俺は何をしてやれた？

君が動かなくなった時、俺は何が出来た？

許されないのは解っている。

———それでも、俺は前に進むから。

『・・・はあ、はっ、はあっ・・・!!』

さざ波の音が聞こえる。昔から大好きな、心が穏やかになる音。

でも、今の状態じゃ、とてもそんな気分になんかなれない。

『は、はあ、はっ、ど、どう・・・ど、して』

自分の手が、勝手にガタガタと震えている。

手や顔に付いた黒い靄モヤの所為なのかな。見慣れたソレが、今はとても怖くて、恐ろしくて。

待ち望んでいた瞬間を、迎えられた筈なのに。

『な、んで、どうし、て・・・?!』

気づけばそう叫んでいた。目の前で倒れ伏した、私の『敵』に縋り付くかの様に。

沢山の同士を葬り去り、残虐な手口で私の全てを手に入れようとしていた、彼。

私の焰を畏れずに真っ向から戦いを挑んできた、彼。

そんな彼が、何故――――

『躲せた筈なのに、どうして・・・!!!!』

私と彼は、長い間戦ってきた。

互いの力はほぼ互角。今の今まで決着が着くなんて事は無かった。多くの仲間を失いながら、私は強くなろうと鍛錬を続けた。

これ以上の犠牲を出さない為にも、彼を越えて、こんな哀しい戦いを終わらせたかったからだ。

ある日、彼の仲間が私達の所へやってきた。どうやら彼から伝言を預かってやって来たようだった。

《決着を着けよう。》

たった一言だけだったが、彼の本気が瞬時に伝わった。

長年、刃を交えた者同士だったから何となく分かってしまった。

漸く終わるんだ、そう思って心配する仲間を置いて、私は彼の許へと単身で乗り込んだ。

そして、何度目か解らない戦いを繰り広げた。

刃と刃をぶつけ合い、拳と拳をぶつけ合いながら、やられればやり返す、そのサイクルを延々と繰り返し返して。

それでも私が幾ら強くなろうとしても、嘲笑うかの様に彼は私の目の前に立ち塞がった。

渾身の力で放ったキャノンも、気合を込めてぶつけた刃も、いとも簡単に受け流され、最終的に真っ二つに叩き折られてしまった。其処に超えられない壁がある事を知ってしまった。

自分の武器を破壊されて呆然とした所を、彼がすかさず攻撃を仕掛けて来た。

そして、何度も何度も私を殴り、斬り付け、蹂躪した。その暴行は、私が動かなくなるまで続いた。

私は絶望した。彼に適う筈が無いんだと、気付いてしまった。

もう武器も無い、使えない。もう体が動かない、私は、彼に対抗する手段を失ってしまったのだ。

霞んだ視界で、何かが蠢いた。微かながらも足音が近づくのが解る。

彼は笑っていた。クスクスと愉快そうに、まるで私を嘲笑うかの様に。

今の今まで彼に刃向かっていた惨めな存在を叩き潰せたのだ。さぞ観天喜地の思いなのだろう。

彼が持っていた剣を頭上に振り上げた。

ああ、私は殺されるのか。このまま、何も出来ないまま。仲間の無念も果たせないまま。

コイツに、こんな奴に、殺されて、残った仲間達も、皆、一緒に、グチャグチャにされるのか。

断片的な考えが、私を奮い立たせた。

これ以上、こんな奴の好きになんかせせない。絶対に。死んでしまった仲間の為にも。

そして、私は側にあった細長い瓦礫を、彼に気取られ無い様に持つと、彼が近づくのを待った。

先に斬られる前に、心臓に突き刺す。そうすれば、確実に彼は死に至るだろう。

彼の腕がビクリと動いた。其れを合図に、私は無理矢理身体を起き

上がらせ、そして――――

――――ドスっ！！！！

彼の身体に刺さる、瓦礫の刃。

私は彼にソレが刺さった事を驚くよりも、彼が甘んじて私の攻撃を受け入れた事に驚いていた。

彼なら躲すと思っていたから。彼は注意深いから、私の最後の一手を潰しに掛かると思ったのに。

それすらしてこなかった。そう、今も剣を振り下ろしもせずただ立ち尽くしているだけだ、今なら反撃のチャンスなのに。どうしても、理解出来ない。

『……どうして』

『……』

『どうして……躲せた筈なのに、なのに何で』

『……』

彼が私の名を呼んだと同時に、剣が床に落ちた音が聞こえた。

ガシャンと大きな音に気を取られていたから、一瞬解らなかった。

彼が、有ろうことか私の宿敵が、私を抱きしめたのだ。

強く、でも息苦しくもない、優しい力で。

ほんの少しの間、沈黙が広がった。

何故、と私は問いたかった。でも、その時何故か涙が出てきて。

悲しくもないのに、彼の体温がとても暖かい事に気付いてしまって、突き刺した筈の心臓の音が、酷く心地よくて、涙が出た。

本当は、私は待ちに待ったこの瞬間を望んでなんかいなかったのかもしれない。

本当は、私は彼と――――

『君の勝ちだよ、おめでとう……』

その言葉に、ハッと我に帰った。気づけば、倒れた彼を胸に抱いた状態になっていた。

そうだ、私は勝ったんだ。憎き宿敵である彼に。

でもどうしてだろう、嬉しくもなんともない。

『嫌、こんなの、私……お願い……』

傷口から靄が漏れ出している。この靄は私達の体内を循環している、云わば血液の役割を果たしている。

だから、これが無くなってしまうえば、彼は――――

嫌だ、速くなんとかしないと。

どうしようと必死に考えてると、彼が私の頬を優しく撫でてきた。愛おしそうに、労わるように。

今迄こんな事、誰かにされた事も無いから、どうしても戸惑ってしまふ。

『い、嫌、ヤダ・・・』

『えほっ・・・せに・・・げほっ・・・』

『・・・？』

言葉を紡ごうとしているが、余程苦しいのか、ゲホゲホと咳込んでいる。

彼が何かを伝えようとしているのは解ったのだけれど、あまりに小さな声だったから、聞き取ろうと私は耳を彼の唇へ近づけた。

でも、彼が言った言葉は、今の私が一番聴きたくない言葉で。

『・・・シアワセ、に・・・なって・・・』

ああ、この卑怯者————

そんな言葉を遺さないで、一緒に居て欲しいのに。

彼の手が重くなっていく。靄も空中に霧散していく、もう体から流れている靄も少なくなっていっている。

止めて、戻ってきて、お願いだから。

どうしよう。涙が止まらない、思考がグチャグチャだ、もうまとまりが付かない。

『あ、やだ、嫌、だっ・・・ヤダ、ヤダ《————》、《————》

《!!!!》

何度も名前を呼んでも、揺すっても、それっきり彼は動かなくなつた。

息を引き取った事を知ってしまった私は彼の亡骸を抱きしめて、ずっと泣き続けた。

さようなら、愛しい人。

もしもう一度逢えるなら、次はどうか私の側にいて。

『~~~~~♪~~~~~♪~~~~~♪~~~~~』

夜闇に浮かぶ銀の月が、鎖に繋がれた十字架の群れを照らし出す。草木の根一本も生えぬ此处は、正に『墓場』という呼称が似合う場所である。

・・・そんな静かに沈黙を守る墓場から、ゆったりとしたバラードが流れ出す。

『~~~~~』

冷たい夜風に乗って聞こえるこの暖かな唄は、地中に居る仲間たちに贈る挽歌なのか。
テノールの声が奏でる美しいメロディーに、亡霊達もウツトリと聞き惚れる事だろう。

『~~~~~』

挽歌を歌っているのは、黒の衣を纏った少年である。

クセの付いた黒のショートヘア、病人の様に白い肌、熟れた林檎^{リンゴ}の様に赫い瞳。

黒のトレンチコートの下には黒のパーカーとズボンという黒尽くしの姿。

そして——赤い二つの角と、骸骨の手。

常人の男の手より二回り大きい手には、ポール・アックスと呼ばれる戦斧が握られている。

『~~~~~』

~~~~~  
・・・パチパチパチ

挽歌を歌い終えた少年の瞳が大きく見開かれる。  
自分以外は誰も居ないと思って気分良く歌っていたのに、どうやら

密かに聴かれていたらしい。  
気が付かない程歌うのに集中していたか、と反省しながらも少年は  
ゲストを見やった。

『そんなに唄が上手だとは知らなかったぞ、エイシエント。今度み  
んなに聴かせたらどうだ?』

『まさか君に聴かれるとは思ひもなかったよ、レン……。』  
『オイコラ、その名前で呼ぶな』

白の炎がプリントされた襟とフードで、あまり表情が窺えない。  
だが、砂色の瞳と、小柄な体に不釣り合いな巨大な機械の腕。  
不機嫌そうにユラユラ揺れる尻尾。

ストレングス。

それが彼女の名前である。

『……。で? 此処に來たって事は、監視の仕事は終わったって事か  
な?』

『ああ、お前に言われた通りの事はやったさ』

随分と安い仕事を押し付けて來たな、としっかり文句も付け足され  
る。

カシャン、と大きな音を立てて、少年————エイシエントの傍  
に、黒い砂が入った小瓶が投げ込まれた。

ご丁寧にも硝子製の蓋がしっかりとビンの中身を封じている。エイシェントは其れを拾って、訝しげに中身を覗き込んだ。暫くの間、角度を変えたり中身を軽く振ったりしながら、中身を観察している。

そして―――ストレングスが退屈そうに尻尾を揺らしていると、漸く彼は口を開いた。

『僅かに《彼女》の力の残滓があるという事は・・・』

言葉を一旦区切ると、意地悪そうに彼の唇が弧を描く。してやったりの笑みを浮かべる彼に対し、ストレングスは一抹の不安を感じていた。主に今後の自分の安否についてであるが。

『始まるのか、この《ゲーム》の終わりが・・・！』

夜月の光を受け、黒い砂が淡く緑色に光る。  
その黒い砂を全て焼き尽くそうと、蒼い火の粉がフワリとビンの中を泳いだ。

\*\*\*\*\*

『B★RSの復活?』

『それは本当か、エイシエント』

『ああ、レン————ストレングスがコレを持ってきたんだ』

場所は変わり、鉄橋の上。

黄金色の空にポツンと残る橋の上には、エイシエントの仲間が待っていた。

その仲間の一人である男に渡すと、彼は中身を吟味する。

彼には眼球といった器官は付いてはいない為目は見えていないが、代わりに触覚が鋭い為、其れを目の代わりにしているのだ。現に今も手で握ったり、指先で形を把握しようとしている。

余段だが、彼は2mを軽々と超えた巨大な体格を持っており、彼が小瓶を持つとどうしても小粒の小石の様に映ってしまう。

『ふむ、確かに・・・お前の言う通り、本物の様だな』

『? 何がだよ、ラーヴァ?』

『・・・全く、お前は鈍感だな。ほら』

ドクロの大男————ラーヴァは隣にいる少年に欠片をポイっと手のひらに落としてやる。

少年はラーヴァとは違い、一般的な体格である。

彼の特徴をあげると、背中に小さく生えた悪魔の翼と、銀髪の頭に

巻かれた銀の星を模したラメが散りばめられたターバンだろう。袖のない黒のタートルネックと腰に巻きつけた白いツナギと、機動力を重視した格好をしている。

『コレが何だって？ ストレンジス。全然何だか解らねえよ』

『いつもながら愚鈍だなファング。まだ解らんのか？』

『……だって俺、感知能力に関してはテンでダメだし……』

ストレンジスの言葉に不機嫌になっている少年、名はファングと言う。

ファングは一通り眺めたであろう瓶を元の場所——エイシェントの手に戻した。

エイシェントは苦笑しながら、まだ解っていないファングに説明をする為に口を開いた。

『ソレね、欠片だよ。デッドマスターの。』

『……え？』

『あれ、知らないか？ デッドマスターが消滅したって。』

『し、知らねえよ、そんなの……』

『ま、そうだよ。でも現にソレ、彼女の亡骸の一部を入れてもらったんだけどな』

『……う、うおおおおっ！！？』

ファングは其れを聞くなり、慌ててラーヴァの後ろに隠れてしまう。彼はこの中で一番そういうグロデスクな事が大嫌いなのである。

戦線では一番の斬込み隊長だというのに、だ。

そう、小瓶の中に入っている黒い砂は『デッドマスターの骸』、その一部分なのだ。

B★RS<sup>マト</sup>がヨミを助け出す際『デッドマスター』と『小鳥遊ヨミ<sup>たかなし</sup>』、この二つの存在が分離し、ヨミは無事に救出されたが、デッドマスターの体は砂粒と化して消滅してしまった。  
それをストレングスが態々<sup>わざわざ</sup>集めて小瓶の中に容れてきたらしい。それは解った。だが、ここで解りきった問題点が浮上する。

『んな罰当たりなモン、何に使うんだよ!!』

そう、彼女の骸なんか使って一体何をするというのだ。

黒魔術か錬金術に使うならまだ解るが、生憎この世界にはそんなのは存在しない。

エイシエントが死体愛好家だったりするならまだしもである。だが、彼もそんな趣味は持ち合わせていない。

ならば、何に使うのか————。

『そんなの決まってるだろ————デッドマスターに、《彼女》を探させるんだよ。』

エイシエントはそう言って、瓶の封をいきなり解いた。

キュポンと小気味いい音を立てた封を無造作に放ると、封を破られた口から中身の黒の砂が勢い良く解放たれ、空へと舞い上がった。その場にいたエイシエントを除く全員は、呆気にとられて宙を漂う砂粒を目で追う。

エイシエントが黒い砂に何か仕掛けたのだろうか。

『と、飛んだ?!』

『流石、自称《B★RSの宿敵》と言ってる程だ。思った通りだな』  
『どういう事なんだエイシエント!説明しろ!!』

ファングの切羽詰まった問いに、エイシエントは空中に飛散する砂粒を目で追いかけたまま答える。

やがて砂粒達は空中で形を形成し、一匹の蝙蝠コウモリの姿となった。

『さっき言っただろ、あの砂粒はデッドマスターの一部だって。一部なんだから思念がそれに染み付いていてもおかしくないだろ?話によれば、デッドマスターは彼女が破壊したらしいし。そうだとするなら、コイツは確実に彼女を血眼で探しに行くだろうし。いやあ、お手柄だよレン!』

『貴様と言う奴は・・・』

『ちょ、ちょっと待て。つまり・・・亡霊の怨念を利用するって事か?』

『うん、そう』

あっけからんと答えたエイシエントにファングは一瞬気を失いかけ



た。

何でそんなぶっ飛んだ考えに到れるんだ、と3人は心の中で毒づいた。

説明している合間にも、蝙蝠は身体が可動するのを確認するように鉄橋の辺りを大きく円を描くように翔き始めた。

『俺達でも感知出来ない位遠くに行っちゃってるみたいだしね。レンの話じゃ、彼女はデッドマスターの根城にしていた地点から忽然と《姿を消した》って言ってるし・・・まあ、コイツの拠点地なんて俺等は知らない事ですし、お家に案内して貰おうかと』

『ちよつと待てエイシエント、コイツの根城へ向かうのか？コイツは《女帝》の配下なんだぞ、どんな罠があるのかも解らないのに・・・！』

ラーヴァの念を押した言葉に、エイシエントは何も言わずにニッコリと無邪気に微笑みを返したのみだった。其れを見たラーヴァ達は硬直した。今の状況下では、彼の笑みは色んな意味を込めてかなりの圧力が掛かっているからだ。

まさか黙って従いてこい、という意味なのだろうか。

というより、寧ろ早く決断しろと顔に書いてあるのが明白である。

ラーヴァとファングは互いの顔を見やると、諦めたのか、深々と溜息をついてしまった。

『それじゃ皆賛同したって事でいきますか！ね、レン！』

『え、待て、私は……解ったよ。』

今の今まで我関せずの状態だったストレングスの肩がポンと叩かれる。

面倒はごめんだと後ずさる彼女であったが、上腕をホールドされて逃げ道を失った。

……どうやら彼女も同じように巻き込まれる前提の様だ。

『それじゃあデッドマスターン家に向けて、全速前進！』

蝙蝠が翔いた方向に向かって、4人は鉄橋から飛び降りた。

彼等にどんな関門が待ち構えているか、其れを知るのは、今は誰もいない――――。

**R e v e r s e**★名も無き墓守の唄／黒き流星に捧ぐ挽歌／（後書き）

ちなみに「墓守」はエイシェントです。

裏世界の皆さんは中々喋ってくれないので、  
勝手にベラベラ喋らせてしまいました。

切実に文才が欲しいと思った今日この頃orz

## **O b v e r s e ☆新たな来訪者（前書き）**

結構話が長くなってしまった・・・！  
長文注意！

## Obverse ☆ 新たな来訪者

真っ暗な道を歩いていた。

何も見えない、何も聞こえない。

きつとこの道に広がる絶望の闇は、終わらない。

きつと、俺のやっている事は、無意味で、無価値で、無意義に等しい。

それでも。

それでも、俺は君に逢いたい―――。

\*\*\*

「ヨミいー！」

「あ、マト。おはよー」

とある晴れた平日の朝。

マトはいつもの通り、近所の高台にある公園に足を運んでいた。  
この公園はマトのお気に入りであり、親友の小鳥遊ヨミとの  
待合せ場所でもある。

坂道を上り、更に長い階段を上りきると、マトと同じ制服を着たセ  
ミロングヘアの少女が佇んでいた。

彼女こそがマトの親友の小鳥遊<sup>たかなし</sup>ヨミである。

性格が天真爛漫なマトとは正反対でとても落ち着きのある子であり、  
普段はとても大人しく知的で真面目。勉学も優れており、運動面で  
はバレー部のキャプテンを務めている。今現在、最後の試合に向け  
てチームの皆をビシビシ鍛えているのだとか。

「ごめん、ちょっと寝坊しちゃって〜」

「大丈夫だよ、まだ余裕は有るし・・・行こっか」

いつもの待ち合わせの時間を5分オーバーしてしまったが、ヨミは  
気にしてない様だ。

親友の優しさに嬉しさを感じつつ、マトはヨミと並んで歩きだした。

————その光景を、妬ましそうに見ている黒い物体の視線に、  
彼女達は気づいていなかった————。

\*\*\*\*\*

「はい、席に着きなさい！チャイムはとくに鳴ってるぞー！」

場所は変わり、教室。

マトは友達のノンと世間話で盛り上がっていたが、担任の登場によって話は中断された。

自分の席に座るように促され、いつもの様に出席を取る筈だが、何故か担任の表情が心成しか嬉しそうだ。それに気づいた生徒達は、担任のニタニタした笑いに戸惑いを隠せず、何が有ったのかとざわつく。

「おら、静かにしろー！出席を取る前に、ここで――――転校生を紹介したい！」

担任の言葉に、生徒全員が耳を疑った。何故ならそんな連絡は、学校集会や先生の説明にも無かったからだ。長い沈黙に包まれる教室。そして、誰かが堰を切った様に間の抜けた声を上げる。

「……え？」

「嘘！今時！？」

「転校生がウチのクラスに来るなんて聞いた！？」

「知らない」

それが合図となり、固まっていた生徒達はまたザワザワと話し始める。

中学3年の春に転校生などと、少し季節外れでは無いだろうか。

眉を顰めて疑っていると、担任がパンパンと手を叩いて生徒達を肃清させる。

「おら、静かにしろお前等！ホラホラ座れ、はしゃぐな！」

生徒達の異常な興奮を厳しく咎めると、先生は気を取り直して教卓から引き戸の方まで移動すると、「入っていいぞー」とドア向こうの転校生らしき人物に声をかけた。次いで、ガラガラと扉が開く音が、静まり返る教室に鳴り響く。

転校生が足を踏み入れた瞬間、マトを含め、生徒達は彼女の姿に目を奪われた。

腰あたりまで伸びた、美しい黒のロングヘア。制服の袖から伸びる艶やかな白い肌。スラリとしたモデルの様な長い手足。

身長は平均の女子よりも高く、見た目としては、ひどく大人びている印象を受ける。

そして何よりも——自分達よりも美しい明眸皓齒な顔立ちに、何処からか驚嘆の溜息が漏れる。

眉目美麗、金枝玉葉。彼女にこの言葉が当て嵌らないで何が当てはまるのだろうか。



担任は黒板に彼女の名前を書いた後、クラスの皆に簡潔に説明する。

「彼女は両親のお仕事の都合によって、この学校に転校する事になった。皆仲良くしてやれよー。ほら、自己紹介してくれ」

自己紹介を促された転校生はクラス全員を一旦眺めると、凜とした声で自らの名を告げた。

「――――くろがね鉄カナコ　と言います。宜しく願います。」

転校生――――カナコは小さくお辞儀した後、押し黙ってしまう。早くも自己紹介は終了した様だ。

クラスの全員は呆気にとられつつも、パラパラと拍手で転校生を出迎えた。

とても短い挨拶に、担任は「あ、そうか、終わるか早いな」と苦笑いしつつも、カナコに席に着くように促す。

その指定された席はマトの右隣。カナコは沈黙を守ったまま、その席に向かっていく。

その間のカナコに対するクラスメイト達のざわめきは半端ではない。九割九分が彼女の持つ美貌に対する称賛や妬みから来ていた。マトもカナコの魅力に心奪われていたが、ヨミ以上にクールな性格の女子がやって来る事に驚きを隠せなかった。

「……此处で良いかしら。」

「あ、あの・・・私、黒衣マト。今日から宜しくね！」

勇気を振り絞って、マトはカナコに挨拶をする。しかし、カナコはマトを一目盗み見ただけで、「ええ」としか返して来なかった。そして、自分の机に荷物を置いて自らも着席する。

返事に手応えを感じられなかったが、マトは休憩時間にも話し掛けてみようと思った。

そして短いHRが終了し、いざ話しかけようとマトはカナコに近づこうとしたが、残念ながらマトの席の周りは沢山の人でこった返していた。

「はじめまして！ねえねえメルアド交換しない！？」

「鐵さんって綺麗な髪だね、シャンプーとか何使ってるの！？」

「モデルさんみたいな体型だね！もしかして運動の賜物だったり！？」

・・・質問半分以上が美容についてであるが、クラスメイト達は転校生のカナコに興味津々のご様子だ。

矢継早に質問を投げ掛ける者も居れば、遠目で尊敬の眼差しを投げ掛ける者も居る。中には携帯電話を態々カナコの顔の近くに寄せてメールアドレスをせびる者もいた。

これでは近づけないじゃないか、そうマトは心の中で小さく毒づいた。

「凄い人気だね、クロガネさん」

「そりゃあ、まあ・・・綺麗だし美人だし、おまけにモデルさんみたいだし。良いよねえ、そういう人って人生得すると思うよ？あたしも美人さんに生まれたかったなー」

「ふふ・・・黒衣さんったら面白い冗談だね」

「え！？酷いノンちゃん！私の人生お先真っ暗でも構わないと！？」

「あ、違う違う！黒衣さんは元々、その・・・」

――――ガタツツ！！

野崎の言葉を遮るかの如く、人気の渦中に居たカナコが唐突に席から立ち上がる。

マト達からの方では彼女の表情は窺えなかったものの、カナコは相当苛立った表情を浮かべて自分を囲むクラスメイトを睨みつけていた。

「御免なさい。私、口喧しい人達と話す義理合は無いの。だから早く席に戻るなりしてくれないかしら。――――今直ぐ、私の前から、立ち去って。」

カナコの底冷えとした殺気に恐れ戦いて中々立ち去ろうとしない少女達に、業を煮やしたカナコは一言一言丁寧に区切って、紅い瞳で彼女達をギロリと睨みつける。その目は正に獲物を見付けた捕食者の如し。

あんなに興奮していたクラスメイト達も、カナコの言葉に従って、蜘蛛の子散らす様に彼女の前から慌てて立ち去った。カナコは其れを見届けると、一仕事終えたとばかりに髪を軽く掻揚げて席に座る。

「・・・す、ごい迫力だったね・・・」  
「・・・う、うん」

カナコの迫力に二人は怯えた。一見真面目そうに見えていたが、まさか殺人鬼の様なオーラを発するなんて思いもしなかった。巷で良く言われる、『美しい薔薇には棘が有る』というものののだろうか。

だが、幾ら彼女達が鬱陶しかったとはいえ、あんな人払いの仕方は無いのではないだろうか。

「心臓が止まるかと思った・・・あれ、ノンちゃん顔真っ青だけど大丈夫？」

「だ、大丈夫、でもちょっとびっくりしちゃったかも・・・」

「————御免なさい、迷惑を掛けたみたいで」

「ふあっ!？」

マトと野崎はヒソヒソと内緒話をしていたが、本人にはしっかりと聞こえていたようだ。

だが話すキツカケは出来たので、ここぞとばかりにマトはカナコにお願いを試してみた。

「あのね、鐵さん・・・良かったらでいいんだけど、今日アタシ達と一緒に昼食食べない？私、鐵さんの前の中学の事とか色々聞きたいな・・・なんて」

マトは警戒心を少しでも解そうと満面のスマイルでカナコを誘ってみたが、野崎にはマトが緊張で引き攣った笑みを浮かべているようにしか見えなかった。

カナコはマトの誘いに目を瞬かせていたが、彼女の不自然な笑みを見て、呆れた様に肩を竦ませる。

「別に構わないけど・・・聞いて得する様な事は無いと思うわよ」  
「え？」

「貴方もさっきの見たでしょ。私、大勢の人達というより『独り』でいる方が好きなの。一人だと気が楽だし、口煩い人とかが近くで話してるとか、耳障りで苦手だし。だから前の中学じゃ交友関係とかはあんまりしてなかったの。他の人曰く、私って凄く寂しい人間らしいわよ」

「・・・そ、それでも！私、鐵さんにすっごく興味あるの！」

マトは鼻息を荒くして言うと、席から立ち上がってカナコの近くへと寄る。野崎は慌てふためいて周りをキョロキョロしていたが、マトは気にせずカナコに語りかける。

「このままの数ヶ月、誰とも話さないで終わるなんてつまんないよ！鐵さんもそんな事言わずに沢山友達作れば、きっとお喋りが楽しくなるよ！・・・それにねあだし、鐵さんとなんだか初めて逢った気がしないの！もしかして、前に何処かで逢わなかったかな？」

「前にも？まさか。私、貴方とは初対面—————『何処かで逢

った』？」

「うん、そう！なーんか鐵さんに見覚えが有るような、そうでも無いような気がして・・・」

「・・・・・・・・」

マトは率直な感想を述べたのだが、直ぐにしくじった事に気が付いた。カナコが頭の中にある記憶の網を手繰り寄せ、何処で逢ったかを思い出そうと黙り込んでしまったからだ。もし違っていたなら赤恥も良いところだ。

「あ、でも可能性での話だから、もしかしたらあたしの記憶違いかもだし！」

「・・・名前」

「え？」

「名前。さっき言ってたけど忘れたからもう一回、貴方は何て言うの？」

「えっと・・・マトだよ。黒衣マト」

カナコは「ふうん」と頷いて、マトの顔を盗み見る。彼女を値踏みするかの如く頭から靴の爪先まで丹念に見回すと、「そうね」と小さくつぶやいた。

「思い出した。私、貴方と逢った事あるわ。」

「え、本当！？ドコドコ！？何処であっただけ！！？」

「それは・・・内緒。教えてあげない」

「ええー！酷い、ずーるーいー！」

漸く解るかと思いきや、カナコの意地悪によって謎が更に深まってしまった。

後ろの野崎は頭にクエスチョンマークを浮かべて話を聞いていたが、マトが少し興奮気味になってしまったので後ろで彼女を宥めに入った。

話している内に1時間目を知らせるチャイムが鳴り、教科担当の先生が教室へと入って来る。

マトはカナコの言葉が気になって仕方なかったが、それを更に上回る事を彼女はやってのけたのだ。

数学の難問を易々と解いてしまう、英語の発音テストで先生顔負けの英語力を披露する、体育の授業でバスケット部の主将であるマトを軽くあしらって点差を着ける等々・・・の授業の中で圧倒的な実力差をクラス全員に見せつけたのだ。

文武両道。才色兼備。おまけに明眸皓齒の美少女。天は彼女に一物も二物も与えてしまったらしい。

マトは益々彼女の事が気になってしまふのだった。

\*\*\*\*\*

場所は変わり、とある男子高校。

HRが後5分で始まるが、クラスの中は元気いっぱいの中が多いらしい。狭い教室で1対1のプロレスごっこをしている者や、コンビニで買ってきたのか友達と一緒に少年誌を読み耽っている者、トランプで賭事をしている者と、朝なのに昼休みの如く賑やかである。

———煩くて堪らないな。

一番後ろの窓際の席に座っている少年は、イヤホンで携帯音楽プレイヤーで今人気の女性ボーカルの曲を聞いていた。だが、クラスメイトの大きな奇声の所為で曲の大半が聴こえない。彼女の歌声が小さいのもあるが、些かボリウムを落として頂きたい所である。

「マサー」

「・・・」

「マサー、はよー」

「・・・」

「・・・おい、頼まれてたCD貸してやらんぞ」

「おはようございます火嶺<sup>かみね</sup>君。」

少年こと、銀城雅<sup>ぎんじょう まさ</sup>はやってきた火嶺という大男に大袈裟な会釈をする、

片手を彼に差し出した。火嶺は一瞬解らなかったが、それが無言の催促だというのに気付くと、バッグから本屋のロゴが入ったビニール袋を雅に手渡した。

「サンキュー。金は後で渡す」

「おお。そんな事より聞いたかマサ。転校生来るって」



「聞いた聞いた。誰だか知らんし、このクラスに来るとしても関係無いけどな」

「冷めてんねえ。まあそんなモンかもな。中坊じゃあるまいし。」

雅はビニールからCDを取り出すと、してやっつたりの笑みを浮かべる。ボーカル名は『トガノ シオン』。

先程雅が聞いていた女性ボーカルであり、若年15歳で音楽業界にメジャーデビューした、今話題沸騰中の

アーティストなのだ。ドラマやアニメ、幅広いジャンルで彼女の歌が使用されており、老若男女、更にはオタク達からも熱烈な支持を受けている。そして雅もまた、彼女の歌のファンなのだ。

「何でそんなにソイツに執着すんだか理解不能だな。えーと・・・誰だっけ」

「てめえ・・・『トガノ シオン』の名前も思い出せないなんて、お前の頭は腐ってるも同然だな。いい脳外科紹介してやるぜ」

「・・・あ、そうだそうだシオンだ。思い出した思い出した」

「・・・お前は俺の話を聞いてたかな、火嶺え？」

火嶺は黙っていればクールで賢そうに見えるのだが、かなりだらしがない上のんびりマイペースな性格なので、彼と歩幅を併せるのは少々大変なのである。話を聞いている様で聞いてない。仕事している様でサボっている。逆もまた然りなのだが、雅はどうも彼の様なタイプが一番扱いづらいと感じ始めている。

そんな火嶺がシオンのCDジャケットを見ながらボソリと呟いた。

「いっつもメソメソした哀しい曲しか歌わないから嫌いだな、俺。もう少し明るい歌唱えねえかな」

「馬鹿かテメエは！！其処がまた良いんだろうが！みんな辛い事もあるけど、その悲しみを乗り越えて元気出そうぜって曲ばかりなんだからよ！！」

「そうか？一通り聞いてはみたけど、なんつうか『私、悲劇のヒロインですう』みたいな、独り善がりみたいな歌ばかりだし・・・」

「お前はもう金輪際シオンを語るな！ど阿呆！！金払わねえぞ！！」

「えー」

ファンとして聞捨てならない言葉を言ってしまい、遂に雅の怒りを買ってしまった。

けれど火嶺にとってはこんなのはいつもの事で、何だかんだ言いつつ、後で雅が全額返金してくれる事を彼は知っている。何年も彼と腐れ縁をやっているからこそ、何となく解るモノである。

————キーンコーンカンコーン

「お、チャイム鳴った。て事でさっさと席に着けノロマ。」

「センサー！銀城君たら学校にCD持ち込んで「馬鹿馬鹿馬鹿うるさいうるさいうるさい！」むゝー！」

火嶺が巫山戯てCDの事を教室に入ってきた担任に告げ口しようとしたが、間一髪、雅が火嶺の口を押さえて口封じをする。他の所も

そうだが、彼等の学校は授業に關係ない物を持ち込むと指導室で説教を喰らう事になる。幸い火嶺の聲は担任には届いていなかったらしく、指導室行きは免れたようだ。

「センサー、転校生来るってほんとスカー？」

一人の生徒が、やって来た担任に素朴な問いを投げ掛ける。

このクラスは体育会系の男子が半数以上も居る為、声が大きくてかなり耳障りなのである。雅はギャーギャー煩く騒ぎ立てる声を鬱陶しく思いながらも、担任の言葉を少しでも拾おうと耳を<sup>そばだ</sup>欹ていた。

「そうぞ。丁度このクラスに転入するぞ。だから皆の前で自己紹介――――」

「やっべ、超楽しみだー!!」

「女の子？女の子とかか!？」

「お前少女漫画の読みすぎだって絶対」

「こらこら、静かにせんかお前等ー!! 時間押してんだからさっさと口閉じろー!!」

担任は騒ぐ生徒達を宥めると、ドアの向こう側向けて「入って良いぞー」と声を掛ける。

次いで、教室の引き戸が控えめに開けられた。

その瞬間、時が止まった。

男子達は唐突に喋るのを止めて、扉の方、その先に居る少年を一斉に見詰めた。

雅も火嶺もまた、扉から出てきた少年に釘付けとなっていた。

少し明るめで長さが短めの茶髪、男子とは思えない白い肌、ヘーゼルナッツ型の透明掛かった紅い瞳。

筋肉は運動部の人間と比べてそんなに量は付いておらず、一見するとヒョロリとした体型である。

そんな皆の注目の的である少年が、真っ直ぐ教卓の方へと一步一步近づいていく。

「よし、それでは自己紹介の方よろしく頼むぞ《鐵》。」

担任は転校生であろう少年の肩を強めに叩く。

あまりに強い衝撃で少年が耐え切れずに軽くよろめいてしまったが、「すまんすまん」と悪びれた様子もなく自己紹介を促した。

「――――えっと、鐵 みかど 帝です。京都からこの高校へ引越して来ました。えー、まだこっちに慣れてない所もあると思いますが、どうぞよろしくお願いします。」

転校生――――帝は一気に捲し立てると、軽く礼をして挨拶を終えた。クラスメイトも帝の紹介が終わると同時、パラパラと出迎えの拍手を帝に贈る。なかには「可愛いー！」と変な野次を飛ばす者さえいたが。

担任は帝の席を指差して彼を誘導する。場所は雅の前の席であった。クラスメイト達はその席が如何にサボリや不貞寝に適しているかを

重々承知していた為、「羨ましいー!」とか「そこ代わってくれ!」等の野次を帝にぶつける。その後直ぐに担任が野次馬の頭を出席簿で叩いて回っていたのは言うまでもない。

帝は後ろの騒ぎを気にする様子もなく自分の席に到達すると、後ろの席に座っている雅に笑顔で挨拶する。

「えーと、どうぞよろしく。」

「・・・・・・・・えっと」

「うーんと、この場合違うか・・・よっす! 数年振り、マサ」

帝は態とらしく軍隊の敬礼をすると、破顔一笑の笑みを浮かべる。とても無邪気で、それでいて幼さを残す笑み。

—————全然変わってねえのな、コイツ

小学生の頃に突然別れたきり音信不通であった幼馴染の突然の帰還に、驚きを隠しきれない雅は「・・・久し振り」と返答するのが今の所精一杯であった。

\*\*\*\*\*

「『みっちゃん』久し振り。」

「ホントに久々だな『カー君』！相変わらずジャイアントな身長してんのな！」

「背丈は両親譲りだからな。こればかりはしょうがない」

時は移ろい、昼休み。

火嶺と雅は帝を半ば強引に屋上に引き連れて昼食を取っていた。幼馴染である帝には色々聞きたい事やら話したい事やらが山程有るのだ。男は過去を振り返らないと云うが、少し位小さい頃の思い出話に花を咲かしても良いだろう。もう一度再会出来たのだから。

「あっちどうだったよ？京都弁とか話すか、やっぱ」

「まあね。最初は都会モンだーって馬鹿にされたけど、段々と言われなくなって、後は平々凡々とね」

「へー良かったな。」

他愛ない話、学校の話、関東と関西の文化差の話――――

――――。

雅達は帝から色んな話を聴いたり茶化したりと、充実な時間を過ごしていた。

「そーいやお前の妹さん、元気にしてる？」

「・・・・・・え？」

「あれ、家族全員で京都行ったんだろ？アイツもあっちで何か有ったろ。彼氏とか出来たとかよ！」

「妹・・・・・・あ、ああ、彼奴ね。別に、いつも通り傲慢不遜を貫い

てお出でで。」

帝はヘラヘラした笑いから急に疲れきった笑みに百面相する。

どうしたのかと二人が聞けば「何でもねーですよー」と、目が死んでる状態で乾いた笑いを浮かべる帝。

きつと触れてはならなかった話題だったのだろう。一体引越先で何が有ったというのだ。

火嶺は話題を振った雅の脇を軽く小突いて、『話題を変えろ』と無言の命令を下した。

「ええっと・・・そういやあ、お前もあっちで彼女とか出来たのか？」

「え？彼女はあっちじゃ作んなかったし、それに・・・」

――――――――――  
ヴヴヴヴヴヴ・・・

言葉を遮るかの様に、帝の制服のポケットから携帯のバイブ音が鳴り渡る。

帝は直ぐ様微弱に震える携帯を取り出すと、器用に文字盤をカチカチと操ってゆく。

「電話だったか？」

「・・・・・・・・・・いや、只のメール」

「ふうん？・・・誰からだ？」

「噂をすれば何とかかんとかって奴でしたな」

火嶺の質問に対し、帝は携帯電話を雅達に見せる事で解答した。  
送り主は彼の妹からだった。

メールの内容は『こっちに来て、初めて友達が出来た』というものであり、ご丁寧添付ファイルまでも付けている。その中を開けてみると、数人の女子が肩を寄せ合ってピースサインをしている写真が貼られていた。

「へえ、良かったな。こんなに友達出来て」

「随分と楽しそうな奴等だな。特にこのツインテの奴」

「・・・先越された・・・」

「？ 何が？」

添付ファイルの写真を見て笑う二人を他所に、帝は一人、不安に満ちた表情を浮かべるばかりであった。

\*\*\*\*\*

「さてと、愛しい愛しい恋人を取られちゃたわね。」  
「・・・五月蠅いぞ」



黄金色の満月が照らす、夥しい数の十字架、それは土の下に眠る住民の群集の唯一の標。

其処に2つの素朴な黒い椅子と、二人の男女が居た。

男は項垂れる様に椅子の背凭れに全体重を預けており、一方女は堂々とした構えで足を組みながら座っている。

「《誓約書》<sup>オーズ</sup>を見つけられなかったのは残念だったけど、《憑代》<sup>ヨリシロ</sup>に嗅ぎつけられたのは幸運だったわ。このまま彼女との距離を縮めれば、《誓約書》<sup>オーズ</sup>を見つけるのは時間の問題ね。」

「……」

「あら、黙り込むなんてらしくないじゃない。いつもみたいに冗談とか言ってみてよ。」

「俺を苛めんのがそんなに楽しいか、お前は……！」

男は後ろの女に向かって苛立ったのか刺々しい言葉をぶつける。悲痛と嫌悪に満ちたその言葉に、女は密かにほくそ笑んだ。二人は後ろを向いて話している為、互いの表情を読み取る事が出来ない。それ故に、女は勝ち誇った笑みを浮かべられているのだろう。

「そう簡単に諦めないでよ。さっきも言ったけど、私は《誓約書》<sup>オーズ</sup>を見つけてないのよ。逆転のチャンスもきつと掴めるわ。」

「……だからって、男の俺に向かって『女子校に潜入しろ』と？「バレたら当分不審者か変態扱いね。アンタの無様な逃走姿が見ものだわ」

「……無理に決まってるだろう、本当にバカだろお前！」

男は遂に頭を抱えて絶望に打ち拉がれる。女の言葉にかなりショックだったのか、上半身を折り畳んで少しコンパクトな体制になってしまった。暫くは立ち直りそうもないか、と女は男のフォローを諦め、また話し出した。

「駒<sup>ピース</sup>も集めた、作戦も一応は立てた。後は盤上に並べて遊ぶだけ」

女は持っていた紅のキング——チェスで使われているモノのようだ——を後ろの方へと放り投げる。クルクルと宙で回転する駒は放物線を描いて男の足元へと転がり落ちた。

男は項垂れた頭はそのまま、視線を転がってきたキングの方へ向けると、溜息をつきながら元の体制へ上半身を起こす。

「貴方も早く用意しといてよね。じゃないと《ゲーム》にならないわ」

「・・・解ってるよ。」

「私との約束の事も、解ってる？」

一瞬だけ、男は息を詰めかけた。それは動揺の表れか、はたまたその約束をただ忘れかけていただけだったのか。どちらにせよ、男は女の質問に「是」と解答せざるを得なかった。

「始めるわね、私と貴方のゲーム。」

「勝つのは俺かお前か、はたまた『彼女』か・・・」

「滅ぶべきは私か、貴方か。決める為の戦争<sup>ゲーム</sup>を始めましょう！」

黄金の月明かりは二人を映す。

やがて訪れる災厄の真実さえもを照らし出す様に――――

## **O b v e r s e ☆新たな来訪者（後書き）**

という訳で、出したかった転校生を先に登場させました。  
デッドマスターの出番はこの後にあります！多分！！（えー

感想・アドバイスお待ちしております！

## Reverse★胎動する闇

黒い流星が空に流れる。

笑い合っていたあの頃の記憶を乗せて、尾を引いて。

その姿は一瞬で消えてしまうから、時よ止まれと誰かが叫んだ。

それでも闇を裂いて消えてしまった星に、俺は願う。

またこの空に、君よ在れと。

\*\*\*

――ガシャリ。

何時ぞやかの鎖の音色が聞こえる。

首と手足が締め付けられて、思う様に動かない。

というか、全身に走る強烈な痛みの所為で思考自体が歪んでいく。

『何故だ?』

奴の声が頭上から降り注ぐ。

好い加減うんざりする位の回数になるであろう問い詰め、俺は視線を少し上の方にして、奴を睨みつける。殴られた所為でちよつぴり裂けた唇を、三日月の形に歪めて、おどけて笑って見せる。

———いつもの様に、ふざけた道化の様に。

『何故ヤツなんだ・・・何故私ではない。』

『何の事だよ・・・』

『恍けるな、あの虫螻ムシケラの事だ・・・!!』

奴は切羽詰った声で叫ぶ。余程余裕が無いのか、奴の顔には焦りの感情しか浮かんできていない。

やつぱり動揺するよなあ。俺達こんな事になってんだし。

『何故だ？何故、奴に肩入れをする？私とお前は同じだろう！ならば奴の首を獲る事が我々の悲願だっただろう、なのに何故お前は奴の側に寝返るんだ!!？』

『・・・は、言うに事欠いて其れか・・・』

『・・・っ!？』

俺の言葉に、奴は訝しげに此方を覗く。ソイツが持つ、俺と同じ色の目を疎ましくて、少しでも視線から逃れようと身体を振る。

首に巻き付く鎖が軋んでギシギシと金属音が耳朶を打ち、軽く首を締め上げる。衝撃で息が詰まりかけたが、構わずに俺は言葉を紡ぐと乾いた口腔内を無理矢理唾で潤す。

『——確かに俺はお前と同じだ。でも、それ以前に俺はお前が大嫌いだ!』

『っ!?!』

『俺はあの子が大切なんだよ。一度は手に入れようと、過ちを犯した。でも今ならハッキリと解る!俺はただ、最初からあの娘の傍に居たかっただけなんだ……!!』

俺は想いの丈を叫んだ。純粹な気持ちを全て吐き出す勢いで。

嘘偽り無い俺の叫びを響かせようと、世界は空間に音の紋あやを刻んでいく。

『もうあの娘を苦しめたくない、泣かせたくない!でも其れをお前等が邪魔しようとしている!あの娘の想いを、俺の願いを、これ以上踏み躪るのなら俺は一切の容赦はしない!!!』

最後の力を振り絞っただけの事はあったのか、奴は言葉を失って放心状態になっていた。

俺も思い切り叫んだから、体中が悲鳴を上げてる。大怪我してんのに馬鹿だなあ俺……

次第に茫然自失の状態から意識を取り戻した。その印に赫の目には涙が浮かび、一筋の涙を音も無く流した。その時の奴の顔を言葉にするなら悲憤慷慨というのが妥当だっただろうか。とにかく端正な顔を醜くクシャクシャにして涙を流していた。

『……どうして、私もお前も同じなのに、どうしてこんなに歪ん

でる――――！！！！  
『・・・・・・・・』

―――そんなに呪わしいか。彼女によって別れた、その体が。そんなに厭なのか。彼女によって別れた、そのココロが。

悪いが、お前と違って俺は後悔なんかしていない。其処がお前との決定的な違いだ。

何方が大きく歪んでいようと、そんなのはどうでもいい。今はこうして《二つ》になってんだから。

―――真っ二つに分かれたココロをもう一度繋ぎ止めるのは、もう出来ない。

『・・・・・・・・俺とお前を一緒にするな。』

『・・・・・・・・！』

『俺は《エイシエント》だ。あの娘の騎士ナイトの役割を担う、ただの《エイシエント》だ。

―――もう俺は、かつての俺じゃ無い。』

『・・・・・・・・うあ、あ―――うああああああああああああああああああ！！！！』

その瞬間の奴の、見るからに痛ましい顔を、俺は一生忘れることはないだろう。

奴が悲痛に満ちた絶叫をした後、俺の視界には大きな鉄の剣が振り下ろされているのが映し出されただけだった。



剣が視界を侵食したと同時に、俺の意識は闇の中に墜ちて行った。

\*\*\*

『・・・シエント、エイシエント』

『ン・・・ん？』

肩を揺さぶられて、漸く俺は覚醒した。

景色は今見ていた青と黒の市松模様の世界から、夜闇に包まれた岩場の上が変わっている。

どうやら、いつの間にか居眠りを決め込んでいたらしい。仮にも自分がリーダーだというのに、この体たらくでは情けないものだ。

まだ眠たい目を軽く擦りあげながら、起こしてくれたラーヴァを一瞥した。

『・・・悪い。気が緩んでた』

『全くだ。敵の根城に着いた瞬間に倒れるとは。全く、リーダーなのにこの体たらくときたら・・・まあ今迄休憩も入れずに走りっぱなしだったからな。俺達も今後の為に少し休んだ方が良いかも知れん。』

『そうだな、ここまで来たらいつ何時襲われるか解ったモンじゃない。』

ラーヴァは俺の隣に腰掛けると、懐から小さな——ほんの一欠片に見える——弾丸の形をした黒い石を取り出すと、腕に仕込んでいた重火器に其れを装填していく。

『念入りだねえ』

『お前等と違って俺は支援向きなんだ。サポート弾切れなんて起こしたら事  
だろ。』

『あはは・・・確かに』

俺はポールアックス、ストレングスは機械のアーム、フアングはアーミーナイフ。

3人共、近接用の武器だから・・・。コイツは体中に色んな重火器を仕込んでるから、一応弾切れの心配は無いと思うが、本人曰く『昔、弾薬を消費し過ぎて危ない目に遭った』らしい。乱射中毒症トリガーハット状にでもなっていたのだろうか。あまりコイツ等の過去を詮索した事は無いから解らない。

誰だって知られたくない過去や秘密だって有るんだ。其れを引きずり出す真似はしたくないし、コイツ等もそんなの望んでない筈だ。なら、現状維持で放置するのが一番良い。

『そーいやフアング達は？』

『俺がお前のお守りをしてる間に、二人が蝙蝠が行った先を見に行ってる。』

『そうか・・・悪い事したな』

自分の体の弱さに思わず苦笑する。絶対帰ってきたら、あの二人にたっぷり文句を言われるに違いない。

というか、此処に来てから倒れた記憶さえ無いとなると、いよいよ俺やバイんじゃないか・・・？

まあ仕方ないさ。そろそろ『時間』が無くなってきているって証拠なんだろう。それまでにあの娘と一緒に、アイツとの《ゲーム》に勝たなくては――――――

そして今度こそ、間違いなく俺を・・・

『・・・シエント？エイシエント！』

『！』

『どうした、ボーツとして。まさかまだ具合が悪いんじゃない・・・』

『ああ、すまない・・・何でもない。ちょっと考え事してただけさ』

心配するラーヴァの優しさと労りに感謝しつつ、俺は戦斧の柄を杖変わりにして立ち上がる。ラーヴァも準備が済んだらしく、俺の方を心配そうに見ていた。

だが休憩も程々にしとかなないと、二人に小言を言われてしまいそうだ。ラーヴァは『まだ休め』と言ってくれたが、これ以上は更に迷惑を掛けると思ったので、もう平気だとだけ言っておいた。

『さて、二人は何処かなって・・・』

蝙蝠の後を追いつけていった二人を探そうと、俺は手の平に全ての神経を集中させる。

頭の中で、手の平に焰が灯るイメージを創り出し、其れが現実になる様に念じると、俺の手から真っ赤な焰が音を立てて燃え上がった。

『何時見ても不思議だな。焰を出せるのは《流星》だけかと思っていたが』

『んー、気が付いたら出来てたってヤツかな？というか、そんなに焰を灯せる奴が居ないのか？』

『俺が知っている限りでは、焰を操る《イクリプス》はお前と《流星》、《女帝》位しかおらん。』

俺はへえ、とだけ返事を返すと、揺らめく焰に対して更に念じる。俺の思いに呼応する様にグラグラ揺れていた火が突如、風に靡いている様にその身体を傾けさせる。

『あっちだ！』

『これもまた凄いモノだな、二人の行った方位が解るのか？』

『まあね、コレはアイツ等の行き先を告げてくれるけど、罠とか敵とかは教えてくれないからね。其処まで細かく念じて無いから』

『・・・お前、祈禱師シャーマンか何かだったか？』

『否、ただの一介の騎士ナイトで御座いますよっと！』

焰が示した方向へと俺は先に走り出すと、一拍置いてラーヴァも慌てて追いかけてくる。

遅れた分を取り返す為にも、先ずは二人を探さなくては。さて、二人は何処まで行ったのかな？

\*\*\*\*\*

『．．．．．』

『．．．．．』

『．．．．．どうすつかな．．．』

『どうするか、では無いだろう。何で此処まで侵入してしまったんだ』

『いやあ、だって蝙蝠アイツが．．．』

『《放置しておけ》と言った筈であろうが．．．！』

ストレンクスとフアングは不味い状況に居た。

事の始まりはほんの数十分前。

デッドマスターの根城に辿り着いた所から始まっていた。

『おおー．．．あのデツカイ城みたいなのが、デッドマスターの．．．』

広大な地平線にポツカリと空いた巨大な穴。

その中には所狭しと並ぶ自然石や鉄で出来た石造りの建物の群集。まるで一つの街である。

今はその殆どが崩れており、ストレンクスが言うには、偵察に行ってきた時よりも原型を保てていないと言う。

『成程・・・此処が《ロストタウン喪われた街》。遙か大昔、俺達の同胞が暮らしていた憩いの街・・・』

『伝記通りで有るなら、我々の軍勢が負けた後は此処を《女帝》の軍勢が乗取った筈だが・・・この廃墟をデッドマスターが根城にしていたのか。』

『つまりは厄介払いして独り占めってコトだろ？ ひっでえ話だな、そりゃ』

フアングはロストタウンの景色を眺めながら呟く。ラーヴァが言うには、自分達は長い間、二つの勢力に別れて戦いを繰り返していたという。イクリプス彼等が戦った時間と年月は、気が遠くなる程のモノであり、多くの犠牲と無数の哀しみを生み出し続けてきた。

だが、二つの勢力をそれぞれ纏め上げていた《王》——つまりは大将が、とある日を境に忽然と姿を消したのだ。それは決着が着いたわけでもなく、挙句互いが尻尾を巻いて逃げたわけでもない。ただ行方不明となっただけなのだ。彼等が居なくなった事で戦争は混乱を極め、終いには仲間同士での疑心暗鬼に陥り、同士討ちで幕を閉じた。

今は《女帝》側に動きが見られている為、エイシェント達も動かざるを得ないのが今の現状である。

『まあ今はその主も居ない只の廃墟だ。さっさと降りて、彼女を確認————』

エイシェントが言うや否や、彼の膝がガクリと落ちる。  
三人が一斉に彼の方を振り向いた瞬間、エイシェントは地に倒れ伏してしまった。

『エイシェント！』

『どうした、しっかりしろ！』

ストレングスが悲鳴染みた声を上げる。ラーヴァが慌ててエイシェントの方へ駆け寄ると、大柄なその巨体を駆使して彼を軽々と持ち上げる。ファングとストレングスは持ち上げられたリーダーの安否を心配していた。

『大丈夫なのか！？』

『・・・気を失っている。もしかしたらデッドマスターの亡骸に掛けた術、かなり負担を掛けるモノだったのか・・・？』

『どうする？此処で時間を潰すか・・・？』

『否、コイツも言っていただろう。俺達には時間が無いんだ、先に進んだ方が良いだろう。俺はコイツの面倒を見るから、お前等はロストタウンの地下に下りて、デッドマスターの住処を探せ。《流星》の力の名残がある筈だ。』

『解った！頼むぞレン！』

『お前までその名前と呼ぶのか！いい加減にしろ！！』

ストレングスとファングは二人仲良く――――とは言えないが――

——蝙蝠が迷い込んだロストタウンの内部へと入っていったのだ。

それが不幸中の不幸、泣きっ面に蜂、弱り目に祟り目となってしまったのか。

今は其れを知る術はないが、コレだけは言える。

『調子に乗って最深部まで潜るから迷子になるんだコノ大馬鹿者！』

『ごはあ！！』

結局、二人は迷子になっていた。今は徒広い廊下と階段、その先に3つの巨大な出入口が有る場所に出ていた。最初はファングが先陣を切って歩いていたのだが、徐々に怪しい場所に出始めたのが運の尽き。

どうやって此処まで来たのかも、引き返そうにも当てずっぽうであつちこつちを行ったり来たりしていたので、正確な位置は誰も知らない。逃げようにも逃げられぬ、正に此処は『奈落の底』。

『おおおゝ・・・《Ogre Arm》で殴んじゃねえよ！』

『五月蠅い！お前の所為で出口も解らなくなつたし、《流星》の力も微弱にしか感知出来ない！無駄骨だ！！』

『？でも《流星》の力が感じられんだろ？収穫じゃないか。』

『人の話を聞いていたのか！？そんな事は百も承知なんだ！何故かつて？私が其れを見たって事をエイシェントに報告したからだ！！解るか！！？』

『お、おう・・・』



ストレングスの剣幕に負け、ファングは2、3歩後退る。  
だが、未だ燃え滾る怒りをぶつけるストレングスはファングにツカ  
ツカと詰め寄って言葉を繋いでく。

『だが、此処で《流星》の姿が消えたんだ！何かしらの術か何か有  
るに違いないから、其れを探しに今迄亡骸を使って此処まで来たん  
だろうが！！』

『そ、そりゃあそうだが！知ってたよ、でも今その力が微弱に感じ  
られんだろ？！だったら・・・』

『探そうにもどっかの誰かがひっちゃかめっちゃかに探し回った所  
為で、場所が何処だか特定するのが難しいんだよ！！！！』

ストレングスは怒りを自身の武器《Ogre Arm》に込め、そ  
の鉄の掌を器用に動かし、拳骨を作り出す。

そしてもう一度、ファング目掛けてソレを振り下ろす。瞬間、何か  
固い物がゴスつとぶつかる音が飴した。次いで、情けない悲鳴が後  
を追う様に尾を引いた。

\*\*\*

碧色<sup>へきしよ</sup>の空に有る大聖堂。その壊れきった廃墟を舞う一匹の蝙蝠。

聖堂の中は意外に破壊される前の原型をкаろうじて保っていた。無数の斬撃や弾痕の傷痕が床や壁に大きく刻まれてはいるが、それでも崩れずにその姿を維持できているのは、ほぼ奇跡に近いのではないだろうか。

その様子を見て、この城の主はどこか満足気であった。このような猛攻を凌げる程に我が城塞の守りは堅いのだと。しかし、憎き仇敵が自分の領域へと侵攻しまったが為に、此の城は落城せざるを得なかったが。

憎いにくいニクイ――――

蝙蝠は苛立ちをぶつけるかの様に黒い羽を透明な空気に強く叩き付ける。

それでも羽撃きが強くなっただけで、何も変わらない。蝙蝠は更に苛立ちを隠せなかった。

何故、自分がこんな姿になっている？

何故、自分の城がこんな酷い事になっている？

何故、自分の存在するべきモノを奪っていった？

理由は彼女には理解出来ない。だが許せなかった。全てを奪った、あの蒼い炎が。

怒りに任せてバテてしまったのか、嘗て自分が座っていた王座の肘掛けに止まって身体を休める。

だが、途端に蝙蝠の体は闇の中へと攫われた。何が起こったかも解らぬまま必死に逃げようともがくが、思いのほか体の自由が利かず、唯一外にはみ出している黒い羽が、ヒヨコヒヨコと頼り無さ気に動くだけである。

『漸く見つけたぞデッドマスター。随分と探したぞ』

静寂の世界に鳴り渡る、無邪気かつ重圧的な声。かつては主が座していたであろう玉座に、エイシェントの姿に相似した少女が座っていた。

黒のロングヘアーに生えた赫い角、黒い骸骨を思わせる長い指……。そして、熟した林檎の様な真っ赤な瞳。

彼女の名は《ブラックゴルドソー》。《鐵の女王》、《殉職する刃》、《血塗れ女帝》と幾つもの通り名を持つ、《イクリプス》の頂点である。

『ふむ。やけに矮小な器に押し込められたモノだな。魂の欠片を黒<sup>ボ</sup>岩に容れて、術で強引に封じたという所だな。エイシェントめ、何処までも油断ならん奴だ……。』

ブラックゴルドソーは独り言つと、ふと小さく笑った。

その笑みは誰に向けられたものなのか、そしてその真意は何なのか。其れを知るのは彼女以外誰も知らない。

そして、ブラックゴルドソーはなんの前触れも無く、手で閉じ込めていた蝙蝠を――――

何の慈悲もなく、グチャリと勢い良く握り締めた。

力を籠めれば奇怪な音を立てて折れ曲がる物体に、少女は甘言を囁いた。

『———奴に復讐したいのだろうか？もう一度、此処に存在したいのだろうか？ならば私が力になってやる———さあ、殻を破ると良い！』

祈る様に握り締めた手から、血の色に相似した赤い光が放たれた。やがて光は大聖堂を飲み込むと、色鮮やかに残っていたステンドグラスをシャンデリアを粉々にしていき、小さな欠片に変えてしまった。壊れずに残っていた瓦礫の建物も、光が起こす不可解な現象によって切り刻まれ、形を徐々に失っていく。

『赫の軍勢の長、《ブラックゴールドソー》が告ぐ！憐れな境涯を迎えし者、無慙の血刀を其の身に受けし者よ！汝を閉じ込める墓の顎<sup>アギト</sup>をこじ開け、我が許へ来い！！』

ブラックゴールドソーは大声で言霊を叫ぶと、収めていた赫い光を宙へと放り投げる。

光はやがて聖堂の天井まで浮かぶと、次第に其の体を大きく熟させ、実らせてゆく。

———パキ、バキバキ、パキンッ！！

赤い光から亀裂が入った瞬間、黒い手の様な形をした花が開花した。

やがて花はグングンと自らの茎<sup>からだ</sup>を精一杯に伸ばし、人の形と成した。  
黒い骨の角を生やした、女の悪魔。

『さあ、目を開けろ！眼前に控える鎖を引き裂け！！今こそ、自由  
を手に入れる時だ！！』

——ぐ、バアアアアン！！

ブラックゴールドソーの言葉に呼応するかの如く、光は自らの体を  
爆散させた。

**reverse★** 嘆けとて、ただ前に（ただいま編集集中です）

誰かは言った。『光あれ』と。

強く、強く、輝きを放つその姿は、まさに生命が誕生しようとしている瞬間にも似ていた。

その光の中心で藻掻く小さな黒い命は、輝く緑の殻から抜け出そうと自身の四枝を外へと躍起に伸ばしていく。

強く、強く、己が命を証明するように――――。

やがて、何かが弾ける音と共に、生命は光の殻から完全に解き放たれた。

――――ゴオオオオオオ……

殻の破片が飛び散る中、空中に優雅に立つ少女の姿が有った。恐ろしい闇の力と昏い嗤笑を湛えながら――――

『んんう……イタタ、体中が軋んじやってるわ！』

『仕方なからう。一度は命を失った身なんだ。それ程の代償で住んだ事を拝謝すべきだな。』

『ええ――――こうして貴方様おんまえの御前に出られる事、至極光栄の極

みに御座います。』

『何だ、改まって。言っておくが我が汝<sup>わたし</sup>を死者の国から呼び戻したのは、奴を誘き出してもらう為だけよ。他に汝を使う動機はない。』

赤い角を戴く少女は、この光景を何処か満足そうに眺めていた。

死骸の欠片を寄せ集めて出来た醜い蝙蝠を美しい少女へと変貌させた魔法使いは、生まれたての少女に向かって彼女は命令を下した。

『さあ、探してこい。お前の憎き敵は、今ものうのと此の世界の空気を吸って生きている・・・』

『・・・敵・・・カタキ・・・？』

黒い骸骨の角と悪魔の翼を持つ少女は、ぼそぼそと言葉を繰り返す。まだ生まれたばかりである彼女の瞳は虚ろにぼやけてはいるが、その奥には、おぞましい位の深い憎しみと怒りが湛えられていた。

『そうだ、だが記憶が戻って無い様だな・・・敵の名を二つ、お前に教えてやろう。一つは《BRS》。お前の《憑代》を抜き去り、殺した奴の名だ。

そしてもう一人の名は――――――《黒衣 マト》だ。』

闇は、密かに笑った。

\*\*\*

鳥の囀りが聞こえてきたという事は、もう夜明けになるのだろうか。  
マトは変な時間に目を覚ました。

「・・・んう、まだ4時かあ」

朝練は6時からなのでまだ30分程は眠れる。そう思い、中途半端に捲れ掛けた掛け布団をモソモソと直し、もう一度寝直す事にした。

それにしても変な夢だった。

見たこともない少年二人と、友達のユウに似たような少女と、まさにゲームに出てくるガイコツの巨人が、小さな蝙蝠を追いかけて変哲な世界を駆けていく夢。

まるで白兔を追いかけて、不思議の世界に落ちた小さな女の子みただい。

しかし、あの物語と違うのは、途中でコウモリが黒いドレスを纏った————まさにヨミそのものだった————少女に変身して、空高く飛んでってしまった。その後、追いかけていた物体を見失った少年達は何十もの不気味な敵に囲まれてしまう。頑張っ其奴等を蹴散らしながらも、空を黄色の絵の具で塗りたくった様な、一面



黄色塗れな世界へと進んでいった。

そこで夢は終わった。

否、強制的に終わらされた、と言えよかったのか。と言うのも、夢を見ている際、何となくなのだが、マトは夢の続きを見るのが怖いと漠然と感じていた。彼等が進む先に何が有るのか、何が待ち構えているのか、其れを見るのが怖かった。そして、彼らが捜し求める《何か》を見つけたその先の事さえも――――

「・・・寝よ寝よ」

そう、寝れば忘れる。また起きたら、きっと何時も通りの平和な日常が、退屈な世界が彼女を待ってくれている。それでいい。

そう、願っていたはずだった――――

\*\*\*\*\*

『まさかデッドマスターが蘇るだなんてな・・・』

此処はストレングスが所持している世界―――――  
―――彼等

は『駒領域』と呼称している——————で、一旦体勢を立て直す事にした。

彼等の着ている衣服は全て砂埃で汚れており、其処から伸びる手足には、軽い掠り傷や切傷がちらほらと付けられている。

ここで何があったかを、振り返ってみよう。僅かな時間で起きた事だ。

ファングとストレングスが瓦礫を撤去していると、突然中から緑の光と凄まじい風が二人を襲った。何かと中を覗いてみれば、デッドマスターがコウモリから元の姿になっているのを目撃した。慌てエイシェントに連絡しようとストレングスが先に走っていったが、間もなくデッドマスターは瓦礫の隙間を通り抜けて、遙か彼方へと去ってしまった。

最悪の状況だった。しかし、そう思うのはまだ早かったらしい。

ドクロの形をした岩の軍勢が————数は百を軽く越えていた————音も無く現れ出て、いきなりエイシェント達に襲いかかってきた。幾ら彼等でも、100以上の数は到底捌く事も出来ずに、仕方なく撤退を余儀なくされたのだ。

『くそ!!』

ファングが地面を強かに殴る。あまりにも強い力で殴ったのか、衝撃で罅<sup>ひび</sup>がピシリと蜘蛛の巣状に入った。

『止めろファング。』

『何だよ・・・悔しくねえのかよ！逃げちまったんだぞ手掛かりが！！』

いつも以上に冷静になっているエイシエントにフアングは苛立ちを隠せない。

大事な道標を失い、大勢の敵に襲われ、ボロボロになって此処まで来たのだ。まさに泣きっ面に蜂、元の木阿弥。この状況で策が何もないというなら最早詰んでしまったようなものである。

『しかも、死体が蘇るだなんて、あれは彼奴の――――』  
『フアング！』

段々と声を荒らげるフアングを慌ててラーヴァが制止させる。

ようやく彼も周りの空気に気づいたのか、申し訳無さそうに俯いて黙り込んだ。

『・・・確かに、死体を蘇生するなんて神業地味な事は、普通のイクリプスには出来ない。』

そう、エイシエントやラーヴァ達は普通のイクリプスを凌駕する程の力を持つてはいるが、死体を蘇生したりだとかの力は持っていない。そんな事が出来るのは、特別な存在のイクリプスだけである。

『そうになると数は一気に絞られる。一つは、我らが流星、』  
《B★R

S  
』』。

エイシェント達が探し求める存在。全ての存在そのものを凌駕する、蒼の炎を宿す少女。

だが、彼等はその可能性を否定した。幾らなんでも、倒した敵を態々蘇生するなんてイかれた真似は、よっぽどの事情が無い限りしない筈。宿敵であるデッドマスターなら尚のことだ。

『そしてもう一つ、コイツの可能性が大だ――――』  
《  
クイーン  
女帝』』

名を口にすることさえも嫌なのか、エイシェントの表情が険しくなった。

彼等が敵対する存在、圧倒的な力で今の世界を屈伏、制圧させている女王。

彼女は絵に書いた様な残虐非道をやったのける冷酷な心を持っている。

逆らう奴等は敵だろうが手下だろうが斬り捨てる、故に『血塗れ王女』等と物騒な渾名が付けられている。  
ブラッディ・クイ

『・・・やはりそうだろうな。厄介な事になった。』

『他人<sup>ヒト</sup>の得物横取りしたんだ、先に捜し出して殺すつもりだろう』

『なら悠長に構えて居られないだろう、これからどうする？』

ストレンジスが抗議の声を挙げる。確かにこれ以上のんびりしている事は出来ない。

彼等の目的はB★RSに辿り着くことだ。敵が増えたのなら早く行動を起こすべきなのだろう。

『ま、確かにねえ・・・お前の言う通り、ゆっくりしてらんないし、敵も俺達の行動に勘づき始めた・・・』

エイシェントは言いつつ髑髏の指で鼻を搔く——————考え事をしている時に出る癖だ————と、ふう、と溜息をついた。

『まあ、此処を越えれば海に出るから・・・周辺を探すしかない。』  
『・・・まさか感知能力だけが頼りってヤツか？』  
『当たり前だ。デッドマスターが案内してくれた御陰で少しは近づいているみたいだし、後は手探りだ。』

微かながらも彼女を感じるのは不幸中の幸いだね、とエイシェントは付けたした。

黄色の太陽が照らす世界から、青い空と海が待つ世界へ。  
四人は先へと歩を進めていった。

\*\*\*

朝。白い光が町並みを、青空を、彩り輝かせる。

世界は何事もないように周り、近所のおじさんが朝のジョギングに行く足音が、遠くで犬が吠える声が、木々が風にその身体を躍らせるざわめきが聞こえる。

マトはそれを自室の窓から眺めていた。起きたての目にはとても眩しい世界を、その目に焼き付けるように。

今日も、彼女の日常が待っている。

今日も、彼女の友達が待っている。

今日も、彼女の世界が待っている。

そうマトは思っていた。

だが、彼女の日常はこの日を境に壊れ始めてゆく……。

## Obverse☆墜落する平和

「異変」というものは至極厄介な存在である。

普段は我々の近くに居ないというのに、気を緩めた一瞬の内に何処からともなく現れ出て襲いかかり、奴等は自分達の持っている掛替えの無いモノを盗み去る。

其れは『時間』であり、『日常』であり、『平和』であり、『<sup>ツナガ</sup>継り』である。

今迄どれもこれも自分がゆっくり時間を掛け、手塩に掛けて育てた大事なモノだ。普通なら絶対に亡くしたくない宝の山々。

だが、異変は其れ等をいとも簡単に奪い、刹那の内に破壊する。気づいて手を伸ばしても、もう遅い。

異変の姿は霧の様に消え、やがて我々を覆い尽くす。

そして此処に、今まさに守るべき日常と平和を狙われた少女が一人。

闇は密かに、彼女を嘲笑う。

\*\*\*

「え、ヨミが保健室に？」

「うん。五時間目の途中で急に具合悪くなったみたいでさ。」

とある日の放課後、退屈な6時間があっという間に過ぎ去り、マトはバックを肩に掛け、ヨミのクラスを覗いた。が、当の本人が教室にいない。偶然出くわしたヨミのクラスメイトに何処に行ったかを尋ねると、どうやら体調不良で保健室に行ってしまったらしい。

「そう・・・ありがとう」

今日の朝は元気だったのに、と心の中でマトは呟いた。ヨミが急に具合悪くなった事など今まで見たことがない。それなりに体調管理はしているし、一体全体どうしたのだろうか。

マトは自分の教室まで歩いている最中も、ヨミの事で頭が一杯だった。

「あれ、黒衣さん？小鳥遊さんは？」

「あ、ノンちゃん・・・」

クラスメイトのノンと鐵がひょっこり教室から出てきた。どうやら



マトがヨミと一緒に来るのを待ってたようだ。しかし、肝心のヨミが彼女の隣に居ないのを見て、二人は少しキョトンとした表情を浮かべていた。

「今、保健室だって。急に具合悪くなったからって、クラスの人が」「そうなんだ・・・大丈夫かな、小鳥遊さん・・・」

野崎が心配そうに呟く傍ら、鐵カナコは少し―――とは言え、いつもと寸分変わらぬ無表情に見えるのだが―――目を細めた。その中に光る、妖しく昏い光。

「・・・黒衣さん。小鳥遊さんの事が心配？」

「え・・・」

「さつきから顔に、『小鳥遊さんの所に行きたい』って書いてある」

徐にカナコはマトの頬を人差し指でチョン、と小突く。小突かれた其処から頬全体に掛けて一気に熱を帯びたのは、きつと自分の本音を見透かされたからなのだろう。マトは自分の赤面姿を見られたくなくて、視線を足元に移して俯いた。

「そ、そりゃあ心配だよ！どうして体調崩しちゃったのかなって思うし・・・朝もお昼も普通に元気だったから・・・無理させたのかなとか・・・」

「・・・なら様子を見に行きましょうよ。もう早退してたなら諦め

て、大丈夫そうなら一緒に帰る・・・これなら良いかしら。」  
「・・・う、うん・・・」

カナコの提案に、マトは承諾した。それならきつと納得はいく。具合を見に行けるし、短時間ならそれ程先生には迷惑はかからない筈だ。後は保健室の中で話せば良い事なのだから。

早速、三人は保健室に歩を進めた。

「あ、そうだ！ユウにメールを・・・」

制服のポケットから携帯を取り出して、ユウにメールをしようと画面を開く。

すると、ユウからメールが届いており、『体育祭の実行委員で、今日は一緒に帰れない』という内容であった。

「・・・ユウ、今日は体育祭のヤツで行けないって」

「そっか・・・」

「仕方ないわよ。後、2週間後なんでしょう？」

とはいえ、ユウがいないと若干淋しいモノもある。ここ最近ユウとマトモに話す機会が減っている。クラスが離れてしまったのもあるが、廊下ですれ違っても少し素っ気ない。部活や帰りが一緒だとしても、何か考え事しているのか、いつもボーっとして何も話さない日が多くなってきている。きっと実行委員やらの仕事で疲れて

いるんだろう、とマトもヨミもそう思っていたので、彼女には何も触れなかったが・・・。

「うん。まあ、体育祭の実行委員は忙しいからね！仕方ないって・・・あ、着いた」

話している内に、目的の保健室に到着したようだ。

マト達の学校には特別棟と呼ばれる、家庭科室に美術室、理科室や技術室など、主に移動授業でしか利用しない教室と、HRや普通授業で使用する教室と別個で別れている。

保健室はその特別棟の1階に位置しているのだが、先程も説明した通り移動教室以外では先生も生徒もあまり利用していないため、殆ど人通りが少ない。  
なので、今はマト達3人程しか人がいない。

————トントン。

ドアをノックする。しかし、中からは声も音もしない。静寂が広がっているだけである。

2, 3回叩いてみたのだが、返事の一つも帰ってこない。おかしいな、とマトは訝しげにドアノブに手を掛け、回してみる。

————ガチ、ガチャツ

「あれえ？閉まってる・・・？ センセー？」

「もしかして今居ないのかな？」

「でも、そしたらヨミ何処に行ったのかな？」

マトとノンが会話していると、カナコが閃いたとばかりに意見する。

「もしかしたら、すれ違いで教室に戻ってるとかじゃないかしら？  
それかお手洗いに行ってるか、とか。」

「・・・ああ、成程！カナコ頭いい！」

マトはポンと手を叩いて納得する。確かにすれ違いになっているのかもしれないし、先生に至っては職員室にいるのかもしれない。

「けど、固まって行動すると時間をロスするわ。野崎さんは小鳥遊さんの教室に、私は職員室に行って、保健の先生が居るか聞いてくる。」

「私は？」

「此処で待機。私達の帰りを待ってて。もしかしたら小鳥遊さんが来るかもしれないし」

「分かった！待ってるね」

マトはそう言って敬礼のポーズを二人に向ける。カナコは職員室へ足を向け、暗くなり始めた廊下を早足で駆けていった。野崎もカバンをマトにあずけると、教室の方へと向かった。

「・・・」

一人になってしまった。しかも、夕暮れの学校の中に。

酷い耳鳴りする程の静寂、蛍光灯が点灯していない夕闇の廊下。まさに何かが出てきそうな雰囲気である。段々と暗くなりつつある空を見ていると、独りだという焦燥と恐怖が押し寄せてくる。

「・・・よ、ヨミィ・・・メールしても返ってこないし」

心細い。というか怖い。オバケが出たらどうしようか。言い様のない恐怖がマトの心を侵食する。取り敢えず誰か一緒に居てくれた方が落ち着くのだが、今はそうもいってられない。仕方なく保健室の扉にもたれ掛かる形で待っていると・・・。

————カチ。

金属音。

否、この音は聞き慣れた音、扉のロックが解除された音だ。

一瞬にして背筋に寒気が走る。誰もいない筈なのに、鍵が開いた。

マトは全身が鳥肌になっていくのを呆然と感じた。

「・・・ヨミ？　ヨミなの・・・？」

もしかして、中で休んでいるのか？そんな安易な考えが脳裏を過ぎる。

試しに扉の向こうに居るであろう人に話しかけてみる。

だが、シン、と静寂だけが返答変わりに返ってきただけであつた。

「・・・もしかして先生？　・・・あの、誰か居ますか・・・？」

返答が無い時点でどんどん気味が悪くなり、自分の声も尻窄みになつてきた。

まさか寄りかかった時に偶然開いたのか？否、扉が勝手に開くなどありえない。

むしろ先程まで施錠されていたのに偶発的に開くのはおかしい。中から意図的に開けられたに違いない。

「・・・し、失礼します・・・」

悩んでいても仕方ない。マトは意を決してドアノブに手を掛けた。

————— カチャ・・・

静かに、ゆっくりと扉が開く。マトはドアを少し開けて隙間を覗き見た。

保健室の中は真っ暗で、外でも様子が見て取れない。寧ろ人の気配など全く感じないのだから益々不思議だ。

「あれ、おかしいな・・・っつ！!?」

————ドンッ

背中に大きな衝撃が走る。マトはその一瞬の出来事に、頭が付いていく事が出来なかった。  
ただ、自分の体が扉の向こうに広がる暗闇に墜ちていくのを感じていた。

\*\*\*\*\*

「・・・黒衣さーん・・・あれ？」

ノンはヨミの教室を見てきたが、彼女の姿は見当たらなかった。其処でクラスメイトの人に尋ねると、帰りの会でも見かけなかったらしい。なのでヨミの下駄箱を覗きに行った所、皮靴がまだ有ったので下校はしてはいなかった。

その事をマトに伝えようと元の場所に戻ってくると、肝心のマトが何処にもいない。

「黒衣さん・・・何処に行っちゃったのかな？」

慌ててマットが居そうな場所を覗いていったが、女子トイレにも近くの教室にも居ない。もしかして、もう中に入ってしまったのだろうか。そう思ったノンは目の前にある保健室のドアノブを握って回してみた。

――ガチャ、ガチツ

「・・・開いてる訳無いか・・・」

当然の事ながら、扉は閉まっている。

鍵も掛かっているし、彼女が保健室に入った可能性はゼロに等しい。ノンは諦めた様に溜息を付いて、大人しく保健室の前で待つ事にした。

「鉄さんも居ないし、黒衣さんもないし・・・どうしたのかな・・・」

彼女は知らない。マットが扉の向こう側に落ちていった事を。



\*\*\*\*\*

「・・・フッフ　なあーんてお気楽なお馬鹿さんなのかしら、あの子」

カナコは職員室にいた。黒く長い髪をフワリと掻き上げながら、そう上機嫌に独り言をつぶやいていた。

すると、彼女は有ろうことか、職員が使用している机にドツカリと座ったではないか。しかもその際に、机の上に置かれていた書類の束やらコーヒークップやらがザラザラと崩れ落ち、バサバサと騒々しい音を立てて床に散乱する。

確実に怒られても過言ではないと言うのにも関わらず、中にいる教員達はカナコの無礼を黙認し、決定的に無視を決め込んでいる。

・・・否、教員達自体の様子がおかしい。

『無視』というよりも、まるで彼女の話を『聞き入って』いる様だ。さも彼女が紡ぐ言葉が神の御告でも有るかのように、真剣に耳を傾けている。

その証拠に、職員全員が作業の手を止め、彼女を敬意に満ちた眼差しで見つめている。

そんな奇怪な状況でも、カナコは独り言を続けていく。

「よくもまあ、命を狙われてるのに一緒に居ようだなんて、あの子

はホント間抜けでお馬鹿さん。でも仕方ないわよね。何にも知らないし、知らされても居ないのだから・・・純粹無垢って、ホントに罪深いわ。」

普段のカナコなら絶対に浮かべはしない、鈴を転がす様な笑み。

そんな一見愛らしい表情に、えも言えぬ戦慄を覚えてしまうのはどうしてなのだろうか？

この表情を浮かべる彼女こそが本来の彼女なのか、それとも冷徹な程に無表情な彼女が本来の彼女なのか。

それはカナコにしか解らない。

『主、吾等<sup>われ</sup>は何を致せば宜しいのですか？』

教職員の一人がカナコに訪ねた。だが、一介の生徒であるカナコの事を『主』等と呼んだ時点で彼等の意思が何処かに行ってしまった様な感覚に陥る。

そう、例えるなら、糸で吊られた操<sup>マリオネット</sup>り人形。

カナコは、そんな操り人形の群れに告げた。

「—————黒衣マトを殺して来て頂戴」

## O b v e r s e ☆墜落する平和（後書き）

はい、gd gdな可能性大かもしれません。

なので先に謝っておきます、すいませんでした！o r z

さて次回、保健室の向こう側に連れてかれた（？）マトの運命や如何に！？

・・・前回も同じこと言っていましたね、すいません（；´Д、）

では次回をお楽しみに！

**chaotic☆★**

**蒼き星、燦然と**

**(前書き)**

お待たせしましたー！  
ようやく完成しました。

それでは7話、張り切ってどうぞ！

**chaotic★**

**蒼き星、燦然と**

深淵<sup>ユリ</sup>までお出で。

悪虐非道の傷痕を、骨の髄まで刻みつけてあげる。

\*\*\*\*\*

目を開けると、其処には闇が広がっていた。

……あれ。

そういえばココ何処だっけ……

……そうだ、確か……誰かに押されて、扉の中に――――

霞み掛かった頭で、先程までの記憶を辿っていく。

確か自分がある場所は保健室……の筈だ。今は周辺が暗闇に覆われ、手元さえも見えないのであまり把握出来てないが、先程まで

は保健室の前に居たのだから間違いない。

「・・・う、うぐう・・・」

俯せの状態から身体を起こすと、床の上で気絶していたからか、体のあちこちが軋んでいる事が解る。それと特に強打したであろう額と腹がかなり痛む。かなりの力で押されたのだし、あの時は不意打ちと言っても過言ではない。

此処から出たら、その人に絶対に文句を言ってやるんだから！とマトは思った。

とにかく此処から外へ出ようと立ち上がろうとした、その瞬間――

――ガッシャアアアアンツ！！

「ぐあぁっ！！？」

唐突に脇腹に走る、強い衝撃。細長い、鞭の様な何かで思い切り叩き付けられた感覚だった。その強い衝撃に細身の体型である彼女が耐えられる筈が無く、そのまま横に吹き飛ばされ、ゴロゴロとボールの様に地面を転がった。

「ううつ・・・」

『あら、生きてたの？』

あまりの痛みに呻くマトを他所に、鈴を転がすような可愛らしい声が暗闇に響く。

マトは慌てて周りを見渡すが、やはり視界には黒色の闇以外は見えない。

『こっちこっち、何処見てんのよ?』

彼女の声の位置からして、どうやらマトの目の前らしい。マトは視線を前方に移して、怪我の痛みをどうにかこらえながらも立ち上がった。

『全く、いつまで経っても起きないからてっきり死んだのかと思ってたわよ。』

「・・・貴方、誰? 一体私に何の用なの? 何でこんな事すんの?」

『・・・ホント《あの人》の言う通り。何も知らない奴って、本当に怖いわね』

怒りと恐怖を抑え、なるべく務めて冷静に質問したが、返ってきたのは意味の解らない言葉と小馬鹿にした様な嘲笑だけだった。もう我慢の限界だと、マトは其処にいるであろう少女に怒鳴る。

「————いいから答えろっ!」

『ああ、はいはい。分かったから騒がないでよ鬱陶しい。』

「っこの・・・!!」

『あらあら怒っちゃった？でも御免なさいね——  
貴方みたいな子猫ちゃんに威嚇されても、全然怖くないのよ!!』

ヒュン、と風を斬る音。あまりに軽快に、尚且つマットが反応しきれぬ程に速い音。

そして頬に感じる、冷たい風の吐息——。

「————っ!!!!?」

動物の持つ生存本能とやらが脳に向かって大きく危険信号を叫んだのか、マットの体は刹那の内に脳から回避命令を出し、自動防御を働かせる。

主の命に反応した従順な体は勢い良く横に傾き、体操選手よろしく軽やかに側転し、攻撃を回避した。

次いで、マットが居た床は爆音と共に放たれた鎖によって自身を穿たれ、粉々に破壊されてしまった。もしマットが躲さないでいたら、確実に身体にどでかい風穴が出来ていただろう。

『あら？憑代のクセに、意外に反応は良い方なのね』

「・・・!!!!?」



声の主は、本当に驚いたとばかりに感嘆の息を吐いた。何故か褒められたマトは動揺したのだが、声の主の近くからジャラジャラと小刻みに鳴る金属音の方がかなり動揺する。

一体何をするのだろうか、マトは身を固くした。先程の様に痛いシツペをされるのはこりごりだ。

マトは覚悟を決めて全身の筋肉を力ませ、地面を貫くのではないかと思う程に足を踏み鳴らした。そしていつでも回避が出来るように姿勢を低くし、前方に僅かに倒す。

いつもやっているバスケットボールの構え。恐らくこの構えこそがマトの最大の迎撃体制であり、彼女が3年余りで磨いてきた必殺奥義でもある。

だが反対に、今の彼女は武器も持っていない、つまり丸腰の状態。マトは今、武器に成り得そうなモノを所持していない。というより荷物は保健室の扉の前に置きっぱなしなのだから何もない。故に、彼女は武器を使用した戦闘を諦め、肉弾戦で勝負しようとしているのだ。

『あらあ？人間如きの分際で、《イクリプス》に戦いを挑むなんて・・・愚の骨頂ね。ホント、無知というのは質が悪いわ』

「・・・さっきから聞いてれば、意味わかんない事ばかり言って・・・！！あたしは此処から出て、友達を————ヨミを探さなきゃなんないんだから！！」

そう、ヨリシロだとか、イクリプスだとか、そんなものはどうでもいい。

マトは此処から出ただけだし、なによりヨミと一緒に帰りたいだけなのだ。

またもう一度、彼女がいなくなるかもしれないと思ってしまいうから

『………《ヨミ》？　ふうん、そう………まあ良いわ』

そして、また金属音。そして舐める様に冷風が体に当たる。

——来る！

今度は大きく後退して躲し、安全な場所へと逃げ込む。  
なぜならば此処は保健室。少なからずベッドやら机やらがあるのだから、其れを使って即席の遮蔽物を造ろうというのだ。

——確か此処等辺に………！！

いつも机がある場所に向かい、闇雲に手探りで机を掴もうとする。  
しかし、幾ら手を伸ばしても肝心なバリケードが見つからない。彼女の手は目的の物を掴めぬまま空を切るばかりである。

「………！？　嘘、無い、無い………！」

『何して遊んでいるのかしら、お嬢さん？』

後ろから少女がマトに声を掛けた。その瞬間、背中に鋭い痛みが走る。

だが今度は金属ではなく、足————つまり蹴りを入れられたのが解った。

その威力は強烈で、マトにとって今までに感じたことのない痛みである。

TV番組によく出るムエタイ選手や武道家のキックって、こんなに痛いのかな。

良く皆耐えられるよな————

マトは前方に倒れつつも、ぼんやりとそう思っていた。

脳の命令は外から来た痛みで完全にシャットアウトされ、体を上手く操縦出来ない。

そのまま彼女の体は為す術なく倒れ、摩擦で皮膚の表面がずり剥ける、そんな痛々しい音をたてながら床を滑った。

「ぐうつ・・・！」

『戦闘中に余所見なんて、随分な御身分ですこと！』

もし彼女がバスケではなく、せめて自身の手足を武器にする空手やボクシング等の武道を学んでいたなら、勝率を少しでも高められたのだろう。

そして何より、見えない敵に背を見せた事が、無謀な敵に挑んでしまった事が間違いなのだ。マトは逃げるべきであった。そして敵に肅清されるべきであった。

戦う術を持たない者は、戦士に殺されてしまうのが道理なのだ。

『さて――――止めと参りましょうか』

斯くて、悪虐非道の刃は落ちる。

\*\*\*\*\*

……貴方を助けてあげる。

貴方が、あの子を助けたかった様に。

今度は、私が貴方を助けてあげる。

\*\*\*\*\*

蒼い星が、燦然と煌めき、瞬いた。

大量の鎖を獲物に向けて放出する。これで目の前に居る脆弱な獲物を殺せば、『彼女』のノルマは遂行される。

そう思った矢先、獲物の身体から《蒼い炎》が灯る。

『――！！？』

その光を彼女は覚えている。

此の火は忌々しい程に暖かく、優しく、何よりも尊く見えてしまう。それと同時に、不死鳥の如く死から目覚めた少女の、覚醒の狼煙ともいえるのだろう。

彼女は動揺した。恐怖した。絶望した。

やはり再び此の世に現れ出たのか、と。

『……遂に出たわね、ブラックロックシユーター命を穿つ者』

怨恨の唸りと共に、少女は炎を纏いながらも立ち上がる。

獲物の先程までの雰囲気、否、何から何まで変化していた。

白と紺色を基調した制服は黒のロングパーカーへ変貌し、同じくら

いに揃えられたツインテールは左右長さが異なっている。

変身した、否、獲物は『乗っ取られた』のだ。

彼女にも言える事だが、今居る怨仇えんきゅうの意思によって、獲物は身体を無理矢理転換させられたのだ。

早めに殺そうとしたのにも関わらず、何たる失態。彼女は自分の爪の甘さに舌打ちした。

だが後悔した所で状況は変わらない。厄介極まりない敵が此処に現れてしまったのは事実である。

澄みきった青の瞳が、真っ直ぐ此方を見つめる。

『……その子を返して、死デッドを征服した者』

**chaotic☆★**

**蒼き星、燦然と**

**(後書き)**

BRS遂に登場！

突如現れたデッドマスターにどう立ち向かうのか？

次回もお楽しみに！

## Chaotic★無限の間、その先の・・・（前書き）

お久しぶりです、モノクロですー

文化祭の合間を縫って、どうにかこうにか更新する事ができましたー

つつても物語はあまり進んでおらず、かなり中途半端な所でぷっつんしちゃってます故、先に言っておきます。ご了承ください・・・。

それでは8話、スタートです！



## Chaotic★無限の闇、その先の・・・

私を呼んで。

その唇で、此の世でたった一つの名を呼んで。

今は怖くて、暁の空を疾<sup>はし</sup>る事が出来ないけれど。

けれど、どうか・・・私に、この一步を踏み出す勇気を。

\*\*\*\*\*

無音の闇を仄かに照らす、一つの蒼き焰。

其の光は筆舌に尽くし難い程に美しく輝き、そして優しく全てを包み込む。

そして、焰から遠くに居るのに感じる、この酷く優しい熱に、思わず涙を零してしまいたくなる。

『・・・だから嫌いなよ、アンタの焰は』

それに照らされている悪魔はボソリと悪態を付きつつも、眼前の少女を見据えていた。

少女の特徴としては、病的な迄に白い肌に残る二つの大きな傷痕。それを隠すように黒のロングパーカーを着用している事。そして、華奢な身体に似合わない程の大きさの鐵の銃砲を構えている事の二つが挙げられるだろう。

ゴツイ砲身を持つ銃砲とは不釣り合いに美しい少女。これが、デッドマスターを含め、同類達の『宿敵』なのだから困る。

『・・・憑代を返さない、デッドマスター』

静かに、けれど凜としたその声は、静寂を守る闇の世界に響き渡った。

その威風堂々な姿と威圧的なオーラに、デッドマスターは氣圧されかける。

以前、彼女とは憑代の奪い合いで死闘を繰り広げたのだが、以前の時のよりも強さや殺氣がかなり増している様に感じた。

———以前よりも力を蓄えたのか、或いは以前の戦いは本気では無かったのか・・・

デッドマスターは前者の考えを否定した。そんなのはありえない。何故ならば、彼女の憑代は極々普通の、しかも戦闘訓練もされていないか弱き少女なのだ。

剣や銃等の武器を大凡身に付けた事も無い、非力な存在。そう言ってしまうと、自分の事も棚に上げている様に聞こえてしまうが、それもまた事実。

つまりブラックロックシューターは本気で自分とは戦っていないかった、という事である。

ただ、彼女は自分と殺し合いをしに来たのでは無く、純粹に黒衣マトという少女の、《また親友と笑い合いたい》、そんなちっぽけな願いを叶えた。只それだけの事だったのだ。

その事がとても腹立たしく、そして何よりも戦士として屈辱的だった。

前に繰り広げた死闘。あんな血肉が踊り沸き立つ様な戦いは、彼女にとっては只の茶番だったのでもいいのか。

『……フン、えっらそうに言ってくれちゃって。』

デッドマスターが拗ねたように文句を言うと、ブラックロックシューターが出し抜けに『★ Rock cannon』の砲口を金属音と共に彼女に向ける。

一瞬、デッドマスターに緊張が走ったが、しかしその後は何も起こらなかった。それどころか、ブラックロックシューターは攻撃もせぬまま『★ Rock cannon』を地に降ろしたではないか。デッドマスターがどうしたのかと不思議そうに一瞥すると、ブラックロックシューターは静かに告げた。

『今のは警告、次はない。』

『・・・成程ね』

デッドマスターはやれやれと肩を竦める。つまり、彼女の意に沿わない回答をすれば、次は間違いなく身体が蜂の巣と化す、という事だ。しかも向けられているのは毎秒20発の岩の弾丸が放たれる砲身だ、次の瞬間にデッドマスターの体は木端微塵になって居るだろう。

だが、悪魔はそんな脅しには屈しない。

何時もの様に不敵な笑みを浮かべ、少女に対しておどけて見せた。

『・・・残念だけど、答えは《NO》よ。そう素直に返すと思ってんの?』

『・・・そう・・・本当に残念・・・』

しばしの沈黙の後、ブラックロックシューターは砲口を再びデッドマスターに向け、蒼い焰と共に岩石を撃ち出そうと引き金に指を引くと同時に、巨大な砲口から黒い岩石が発射され――――

――カチャン!

――・・・ない。

『・・・!!?』

ブラックロックシューターは、ここぞという時に空回りした砲身を見やる。

——動作不良か？否、そんな事はない筈。そうでないなら、一体……！？

そう、『★ Rock cannon』に此れといった異常は見られない。寧ろ正常の状態を保っている。

原因は何だと思いを巡らせていると、徐にデッドマスターが呆れた様に口を開く。

『相変わらず強引な奴ね……言い忘れてたけど、そんな事しても無駄よ』

『……？　　』  
『……？　　』

今度はブラックロックシューターが訝しげにデッドマスターを見た。思っていた以上の反応だ、とデッドマスターもニンマリと余裕の笑みを浮かべた。

『この世界は表世界に強制的に繋げた《ピース・テリトリー駒領域》なの。  
イクリプス』

本来、裏世界に住む私達の世界と、表世界に住む《憑代》の世界は、例外が無い限り、お互いに干渉出来ない。コインの表裏みたいにね・  
・其れ等の間を無理矢理結んで出来た、表でも裏でも無い世界。  
つまり此処は境界線の無い、とても曖昧で不安定な世界なのよ。』

『……つまり？』

『あら、まだ解んないの？　　』  
イクリプス 《私達》は《ピース・テリトリー駒領域》の中でしか、十二

分な力を発揮出来ないの、忘れたの？

『・・・・・・・・！』

ブラックロックシューターは漸く理解出来たとばかりに、顔を青くさせた。

『つまりこんな曖昧の世界ではアンタの焰は只の灯りだし、アタシも満足にアンタを傷つける事が出来ないってワケ。それに・・・・こうしている間にも《憑代》の《侵食》は始まってるって事よ？』

にこやかにデッドマスターは残酷な真実を告げた。

\*\*\*\*\*

突如現れたブラックロックシューターが声の主と対峙しているその頃、マトは蒼と黒の市松模様の床と天井の不思議な世界に居た。何も見えない闇から急に一変、突如こんな変てこりんな世界に放り出された上に、状況が益々掴めなくて混乱してしまいそうになったが、とにかく冷静にならなくちゃ、と自分で自分に言い聞かせる。

「とにかく・・・出口探して戻らなきゃ・・・」

そして、保健室から出てミツカやカナコに助けを乞わなくては。こんな状況から一刻もオサラバしたいものである。  
しかし・・・

「・・・ふええ、広すぎて分かんない！！」

そう、マトが今居るのは、思わず頭を抱えて仕舞いたくなる程の広さの部屋。縦横無尽、無限に続く市松模様の壁と床だけが有るだけ。標識とか、そんな生優しいモノすらもない部屋に独りぼっちのマト・・・そもそも、此処は部屋と呼べるのかどうか不安である。

「此処何処お・・・誰か、助けてえ・・・」

情けなく涙混じりの声で助けを懇願するも、悲しきかな、何も起こらない。

マトが幾ら誰かを呼ぼうと、泣き叫ぼうと、現実はとても悪逆非道、其処に救いの手はない。マトは途方も無く、暫く広大な世界の中心で呆然と立ち尽くしていたが、結局彼女は体操座りで壁に寄り掛かって、助けが来るまでジッと待つ事にした。

最初は宛もなくウロウロと出口が無いか辺りを徘徊していたが、出口どころか部屋も何もない空間が果てしなく続くだけであった。

彼女が打てる唯一の手段としては、他人の手を借りて脱出する他は無かった。

「・・・もしこのまま、誰も来なかったら・・・私、餓え死にしちゃうのかな・・・」

最早出るのは自嘲じみた言葉と憂鬱な溜息、そして螺旋を描いていくネガティブな思考だけ。マトは声を上げて大泣きしたい気持ちかかれていた。こんな不幸に不幸を重ねた体験をしたのは産まれて初めてだったからだ。突然倒れたヨミの様子を見に行こうとしたら、後ろから誰かに殴られて真っ暗な保健室に放り出されるわ、見えないう敵にフルボッコにされそうになるわ、短時間で散々な目に会った。しかも、現在進行系で、良く解らない世界に放置されているのだから弱ったものである。

————— 一体、私が何をしたっていうんだろう。

————— 私は何もしてないのに。親友や皆と一緒に笑<sup>ヨミ</sup>い合いたいだけなのに。

————— 神様は私を憎んでいるの・・・だからこんな目に会<sup>ヨミ</sup>うの・・・？

脳裏の隅っこに浮かぶ言葉が、如何に自分が疲弊しているのかが伺える。

だが、其れも詮無き事である。

段々と考え込んでる内に、目頭が急激に熱くなってくる。ビリビリ



とした痛みがマトの視界をボヤけさせ、勝手に肩と喉が痙攣したかの様にヒクヒクと小刻みに揺れる。慌てて止めようとしても、理性だけで生理的現象を止められる筈もなく、やがて理性の堰は音もなく崩壊した。大粒の涙がボロボロと流れ落ち、制服のスカートを濡らしていく。

「っ、・・・・・・・・うぐ・・・・・・・・ふっ・・・・・・・・ふうう・・・・」

孤独という悲しみに満ちた慟哭を聞く者は誰一人居ない。不安という救済を求めた嘆きを聴く者は誰も居ない。彼女を救う手立ては、今は何もない。

誰も彼女を救えない――――――――――

## Chaotic★☆ 無限の間、その先の・・・（後書き）

さて、此処で追加補足・・・というか説明。

マトが知らずのうちにやってきたのはOVA冒頭のとある場所。  
OVAを見た方なら解るはず・・・！

後、この後の展開についてはどうしようか考え中です・・・（；、  
ん、

だ、大丈夫。アイデアは有るが、無い頭で文にまとめるのが難しいだけだ！！

て訳で、次回をお楽しみに！

## **C h a o t i c ☆ ★ 一難去って、また一難？ (前書き)**

お久しぶりです！

ようやく更新にこぎつけましたー（＾ ヲ ＊）ホッコリ

それでは第9話、どうぞ！

## Chaotic☆★一難去って、また一難？

『ほらほらどうしたのよ！！さっきの覇気が無くなっちゃってるじゃない！！！！』

『・・・・・・・・つく・・・・・・・・！！』

ギイイン、と鋭くも鈍く響く金属音が闇に衍する。  
変則的に宙を舞い踊る鎖の群集と、黒い刀身を持つ一振りの刀が火花を散らしてぶつかり合う。

幾度もなく襲いかかる鉄の蛇に、ブラックロックシューターは刀で軌道を反らすか、切り刻む以外には成す術がない。

『蒼い炎さえ無ければ、アンタなんか怖くも何ともないのよ！！この《はぐれ者》が！！！！』  
『・・・・・・・・！！』

鉄の蛇を背から射出するデッドマスターは、鎖の一筋を手でたぐり寄せて掴みとると、鞭の様にヒュンと振り翳し、態とブラックロックシューターに当てずに、その横に向かって鞭を地に叩きつけた。  
瞬間、バシイイイン！！と豪快な轟音を立てて一直線に地面は割れ、瓦礫と砂埃を飛散させて崩壊した。

『なっ・・・・・・・・』

ブラックロックシューターは鎖の鞭のあまりの破壊力に目を疑う。  
同時、コレをまともに喰らえば一溜りもない事を本能が察知し、体全体を強ばらせる。

本来なら大砲で一発撃てば問題無いだろうが、蒼い炎が使えない上に、標的<sup>まじ</sup>は一本一本が繊細かつ小さい鎖。塊で来るならまだしも、単発でだとの的を絞るには難し過ぎる。

『さああて、もっともっと楽しみたい所だけど時間も押してきちゃってるわねえ・・・・・・・・』

『時間・・・・・・・・!?!?』

ブラックロックシューターが不思議そうに呟いたのを見て、デッドマスターは顔を綻ばせた。

暗く、人を見下した様な————正に悪魔の笑みを。

『さっき言ったでしょ？此処は無理矢理表と裏を結びつけた不安定な世界だって。』

『・・・・成程、少しの時間でしか繋ぎ止める事が出来ないって事ね・・・・』

『御名答——♪ それじゃネタバラシした事だし—————そろそろ死んでくれないかしら?』

心底楽しそうにデッドマスターは微笑むと、振り下ろした鎖を一旦宙に浮かせると、今度はブラックロックシューターに向けて力一杯叩きつける。

其れを瞬時に感知したブラックロックシューターは、素早く横へと跳んで回避する。

誰も居なくなった床を、鎖が舐めとるかの如く地を幹竹割りに裂いてゆく。

そしてガッシャアアアン！！という轟音と砂埃を豪快に撒き散らしながら、鎖が地面にめり込んだ。

ホッとするのも束の間、デッドマスターは次の鎖を手繰ると、また同じように鎖を地面に叩きつけていく。彼女の背には何千何万もの鎖の束が有るのだ。油断していたら確実に鞭の餌食になるだろう。ブラックロックシューターは持っていた武器を盗み見た。

刀でアレ等を全て切り裂けるだろうか？

答えは否、不可能だ。

先程もそうだったのだが、刀身に鎖が絡まって上手く斬り裂く事が出来ないのだ。それに刀というのは対人用且つ近距離用の武器に過ぎない。遠距離用の飛び道具の前では只の鉄の板に等しい。この刀は鋼鉄を意図も容易く一刀両断する事ができるが、攻撃を躲したり斬ったりしている内に刃零れしている。こんな事は滅多に無いが、これもこの世界の影響なのだろうか。

ブラックロックシューターは刀で応戦するのを諦めたのか、床に武器を投げ棄てたではないか。そして代わりにボクサーの様に拳を前方へ突き出すと、デッドマスターに向かって肉薄する。

『あら、負ける気になったのかしら！！？』

勿論、ブラックロックシューターはそう思っている訳もなく。勝算は有るものの、問題は彼女に気取られてしまわないかである。

襲いかかる鎖を躲し、時には足場にしながら徐々にデッドマスターとの距離を縮めていく。

かなりの距離を詰められた事で彼女も余裕が無くなってきている様だ。焦っているのが丸解りである。

先程の鎖の攻撃で解ったのは、アレは中距離用の攻撃だという事。幾ら攻撃力が桁外れだとしても、所詮は遠くに居る敵用の武器。押して駄目なら引いてみる、遠くにいるなら近づいてみればいい訳である。

『・・・ちい、来るなコノ――――』

『――――これで、終わり!!』

ブラックロックシューターは言うなり拳をデッドマスターに向けて突き出す。

デッドマスターは直撃するのを覚悟して、反射的に目を瞑った。が

――――  
拳はデッドマスターの顔面に直撃することもなく、彼女の頬すれすれを掠っただけだった。

そして、突き出した拳ごとブラックロックシューターはデッドマスターの横を通り過ぎると、鎖の一本を手で鷲掴みにする。

『っな・・・!!』

しまったと後悔するも、時すでに遅し。

ブラックロックシューターはデッドマスターの身体に鎖を巻きつけ、手と首を拘束した。

そう、敵の捕縛こそ、彼女の狙いだったのだ――――！！

『これなら、炎を使わなくても関係ない!』

『つく、油断した・・・!!』

『さあ、コレが最後の警告。憑代を開放して、デッドマスター!!』  
『く・・・誰が、アンタの指図なんか受けるもんですか・・・!!』

デッドマスターは鎖を引きちぎろうと足掻くものの、一向に壊れる心配が無い。

このままでは、ブラックロックシューターに引導を渡して仕舞いかねない。

どうすれば、とデッドマスターが思考を巡らせていた、その時――

――ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・

この空間を蝕む闇が戦慄いた。突然震え出す地鳴りの音と共に、空間に白い亀裂が生まれる。



『!?!?』

『空間がもう持たないわね・・・それじゃ、私は御暇させて頂くとするわ』

デッドマスターは鋭い爪で先程傷だらけにした鎖の輪を一気に切裂き、手を先に自由にした。ブラックロックシューターが慌てて彼女を捕まえようと手を伸ばしたが、其れをスルリと躲して、逃走するのに十分な距離を置いた。

『待ちなさい!』

『悪い事言わないから、アンタも逃げた方が良いわよー?それにさつきも言ったでしょ?アンタの憑代もアタシのも消耗しちゃってるのよ。無くしたくないならさっさと撤退するのをお薦めするわあ』

———それじゃ、またね。

デッドマスターは踵を返すと、そのまま闇に溶け込み、消えていった。

ブラックロックシューターは暫く彼女が消えた方向を見つめていたが、空間の崩壊が激しくなったのを確認すると、自身も暗闇へと姿を消した。

\*\*\*\*\*

「う・・・あ・・・？」

目を開くと、視界は濃紺の闇で覆われていた。

まだボンヤリする頭をフル回転させ、先程の出来事をフラッシュバックしてみる。

ヨミの突然の体調不良、保健室に広がる謎の空間、そして・・・其処で、自分はまだ変な空間の中にいるのかと、軋む身体を無理矢理跳ね起こした。

しかし、よく見れば其処は見慣れた学校の廊下であった。

入る前と今の違う点を上げれば、時間が夕方から夜になった位の差異であろうか。

「戻って、きたの・・・？」

座り込んだまま、辺りをキョロキョロ確認して見る。やはり元の場所に戻ってきた様だ。自分の隣に保健室のドアが有る。そして、自分が置いていった通学用のバッグもポツンと残っている。だが・・・

「ヨミは？ノンちゃんも・・・カナコも居ない」

そう、さっきまでヨミを探しに行ってくれた友人達の姿は何処にも見当たらず、今はマトを除いて一人も居ない。シンとした静寂が、月明かりに照らされた夜闇の中に降り注いでいるだけである。

マトは徐に立ち上がると、保健室のドアノブを動かした。

ガチャガチャと耳障りな金属音を立てるが、それでもロックが掛かっていた。

「夢・・・？」

先程のあの出来事は、全て夢だったのだろうか。

謎の声が語る、『イクリプス』も、『憑代』も、あの少女さえも。

だが・・・

身体に受けた痛みが、手足の先に残る小さな痣が、頭で未だに何かの危険信号を放つ本能が、マトに教えてくれる。

まだ、何も終わってはいないのだと。

## Chaotic☆★一難去って、また一難？（後書き）

第9話いかがでしたでしょうか？

この後は、遂に・・・遂に私が書きたかった話へと入っていきます！  
チキしょう、ここまでこぎつけるのにかなりの時間が掛かったよう・  
・（；ω；）

そうそう、活動報告でも書いたのですが、ちょっとお知らせが御座います。

この間、自分で自分の小説を読み返して、「色々と説明足りてないよねー」と思い、ただいま1～8話を編集&テコ入れしたいと思います。

新しくお話を入れたり、ここ文法的に間違ってるよなって所とか色々してます。

今現在は2話までテコ入れ終了しており、残りは絶賛作業中です（汗）

また忙しくて亀更新になってしまいましたが、応援宜しく願います！

それでは！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0436s/>

---

BLACK★ROCK SHOOTER -PHANTOM-

2011年11月16日02時52分発行